

## 高橋和巳 BBS 投稿記事

(2007年8月2日～2022年1月3日)

これまで利用してきた Teacup の掲示板サービスが、まことに残念ながら 2022 年 3 月 1 日をもって終了することとなりました。今のところ掲示板再開の予定はございません。そこで投稿された記事をまとめて保存いたしましたので、どうかご利用ください。

申し上げるまでもありませんが、ここに収録された記事を引用される場合は、かならず出所 ([http://hakuhyodo2.art.coocan.jp/t\\_kazumi\\_bbs.pdf](http://hakuhyodo2.art.coocan.jp/t_kazumi_bbs.pdf)) を明記されますようお願いいたします。

なお読みやすいように、各記事のタイトルには「■」マークを付しておきましたが、付け忘れなどあるかも知れず、お気づきの方はご一報くださいますようお願いいたします。

2022 年 3 月 7 日 「高橋和巳を語る会」サイト管理人 薄氷堂

■ 頌春 投稿者: 太田代志朗 投稿日: 2022 年 1 月 3 日(月) 07 時 55 分 32 秒 返信・引用 編集済

あけましておめでとうございます。

皆さまのご多幸、ご健康をお祈りいたします。

年末・年始の人の動きが盛んになっているようですが、

まだまだ、自々粛々の日々がつづきます。

昨年は高橋和巳没後 50 周年。

そこで、福島泰樹氏のインタビューを受け、「月光」69 号で、

「高橋和巳とは何であるか

——没後 50 年、寄り添う青春と文学の構図」

として、思いのたけを述べ、纏められた。

もとより回顧的、矮小的な文学論でなく、新たな高橋和巳像の展開を念じている。

(販売: AMAZON、版元ドットコム、紀伊国屋書店ほか)

また『高橋和巳・高橋たか子電子全集』(小学館)も好調、発信中。

多くの資料(生原稿、メモ、写真)も満載。

昨年はダメでしたが、今年はぜひ富士霊園詣でに行きたい。

そして、老体のメンテナンスをはかり、

ウォーキング&ゴルフも大いに楽しみたいつもりですが、さてどうなりますやら。

本年も、どうぞよろしく願い申し上げます。

■高橋和巳没後 50 年 投稿者：藤田伊織 投稿日：2021 年 12 月 28 日(火)14 時 07 分 59 秒  
返信・引用

ほとんど、何の記念行事もないまま、この年が終わろうとしています。  
残念。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■太陽族と憂鬱派 投稿者：太田代志朗 投稿日：2021 年 10 月 21 日(木)09 時 11 分 13 秒  
返信・引用 編集済

石原慎太郎の書き下ろし『あるヤクザの生涯——安藤昇伝』(幻冬社)を読んだ。

「長い後書き」によれば、「肉体派の私にとって死を背景にした暴力なるものは、目を背けることはできぬ人生の主題だった」という。

それは「理性の範疇を超越した行為」であり、『太陽の季節』以来の石原文学のテーマであった。

高橋和巳はこの『太陽の季節』の時、同じく文学界新人賞に応募、落選していた。

太陽族と憂鬱派の決定的文学の位相である。

あれから 70 年——石原慎太郎は同世代の作家にいう。

「高橋和巳についてしきりに思われるのは、彼がもし今まで生きていたとしたなら、彼自身の文学にどんな本質的変化があったらと想像したくなるからで、かつての時代を支配していたイデオロギーの対立が一応終焉してしまった今、彼が依っていたと思われるある価値体系への評価の変化が彼の書くものにどのような変化をもたらしたのだろうかと思われるせいでもある。」

(『わが人生の時の人々』文藝春秋)

■Re: 高橋和巳・高橋たか子 電子全集について 投稿者：藤田伊織 投稿日：2021 年 9 月 17 日(金)14 時 08 分 51 秒 返信・引用

高橋和巳の作品ならば、著作権法が改悪されなければ、来年には著作権保護期間が満了して、青空文庫で無料で読めるようになっていたはずだし、無料はともかく、コピー制限などなく、自由にファイルを閲覧利用できて、外国の研究者も、ひょうつとして翻訳する気になったかもしれません。残念です。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■高橋和巳・高橋たか子 電子全集について 投稿者：薄氷堂 投稿日：2021 年 9 月 3 日(金)21 時 53 分 33 秒 返信・引用

太田代志朗さんからご投稿があったように、小学館の高橋和巳・高橋たか子 電子全集 第1巻『邪宗門』が発売になりました。もちろん Amazon から楽天からも入手可能ですので、興味をお持ちの方は検索していただければ幸いです。

私自身は電子辞書はヘビー・ユーザーなのですが、情けないことに電子書籍のほうはさっぱりで、現在購入して利用しているのは楽天 kobo の一冊のみです。したがって Amazon についてはまるで語る資格はありませんが、楽天 kobo の場合、専用のアプリをパソコン(またはスマホ)にインストールし、インターネット環境で表示される購入書籍のアイコンをクリックして読むことになります。たぶん Amazon も同様だと思います。

私が利用中のものにかぎっていいますと、コピー & ペーストが出来ないなどの制約はありますが、文字サイズを簡単に調整できますので、たとえば老眼で細かい文字が読みにくい方にとっては便利でしょう(目が弱ると文庫本を読むのはしんどいものですから)。パソコンだけでなく、スマホで読めるというのも利点ですね。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■「高橋和巳電子全集」配信 投稿者:太田代志朗 投稿日:2021年8月20日(金)10時13分11秒 返信・引用  
2021年――残暑お見舞い申し上げます。

8月20日(金) 晴れ、大気不安定。  
朝早くから青空がひろがり、33°Cの暑さ。  
公園には桜の落ち葉でいっぱい、大気不安定でまた雨、雷になるらしい。  
緊急事態宣言下、何することもなく、だらだら過ごしてしまった。  
武州古城下に老残の夏がすぎっていく……。

小学館の「高橋和巳・高橋たか子 電子全集」(全24巻)。  
半年遅れでこの8月27日、いよいよ長編「邪宗門」をもって配信。  
水無月・日詠 投稿者:太田代志朗 投稿日:2021年6月24日(木)06時28分26秒 返信・引用

6月23日(水) 雨、曇。  
Fクリニックでリハビリを終えると、激しい雨。  
その叩きつける雨の中を、AQUA 安全運転で帰る。  
午後から陽が射し青空がひろがる。甚平の着心地よく昼寝。  
立花隆さんが亡くなった。80歳、70～80年代「田中角栄研究」「日本共産党の研究」など。

6月21日(月) 夏至、晴れ。  
晴れ、梅雨の合間の公園ウォーキング。榎が咲いている。  
心身がだらけて気張れず、PCに向いても何もすすまない。  
ウィルスバスター契約3年版更新16,000円のコンビニ支払いを済ませ、シャトレーゼでアイスクャンディを買ってくる。――コロナ禍の東京五輪断行、耳おおいがたい狂騒。

6月17日(木) 石川淳を読む。

昨日の大雨が止み、時々陽がさし、風が流れていく。

家人がでかけたので、昼食に缶ビールで稲荷寿司。石川淳を読む。江戸、狂歌、遊学——ひからびてしまったやつがれの”精神の運動”なり。

6月15日(火) 60年安保——わがセンチメンタル・ジャーニー。

晴れ。早朝5時に起きる。ゲラを見ていると、また手を入れたいくなる。

昼前に100円ショップで文具2、3点買ってから公園ウォーキング。夏の陽ざしがまばゆく、緑陰にこころよい風が流れている。

安保6・15——わがセンチメンタル・ジャーニー。挫折、闘争、実存、京都20歳、すべてが可能に満ちていた……。

■福島泰樹氏と対談 投稿者:太田代志朗 投稿日:2021年6月16日(水)06時58分8秒

返信・引用 編集済

このたび、福島泰樹氏と「高橋和巳没後50周年」につき対談を行った。

このところ福島氏とも会っていないが、季刊『月光』の特集でその申し入れがありがたくも、当初は躊躇した。

当方は無聊をかこっているわけだったが、久方に会って話していると、その思想、志、文学の再確認であり、供養であるように思われてきた。

『バリケード 1966』で歌壇に鮮烈にデビュー、その福島泰樹が高橋和巳を三顧の礼でもって鎌倉に訪ねたりして、早稲田の講演会に招いている。

また「国文学」(1978年1月)特集では「知識人の存在根拠——時はいま晩秋にして」を書いている。

高橋和巳を偲ぶいい文章だった。同士がいると思った。

姑息な編集者が、高橋和巳伝説にやっきになっている頃で、何かと悶々としていた。

その福島泰樹と会うのは1987年夏のことで、18年たっていたことになる。

初めて会い、その場で酒になり、菊寿司にまわり、気がつくとも根岸の明け方になっていた。

どういう形に纏められるのか、これからのことになるが、東京・神田の発行元の皓星社の対応もさわやかで、楽しみにしている。

■古川修さん 投稿者:藤田伊織 投稿日:2021年5月5日(水)13時59分26秒 返信・

引用

古川修さんとは、京大建築の方でしょうか？

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■高橋和巳没後 50 年 投稿者:太田代志朗 投稿日:2021 年 5 月 5 日(水)06 時 57 分 16 秒  
返信・引用 編集済

三島由紀夫自裁で一つの時代が終わり、そこから新たな 70 年代が幕開けしようとしていた。憂愁の「邪宗門」をくぐり、「黄昏の橋」をわたり、「遥なる美の国」が紅蓮に燃え上がっていた。しかし、「連帯を求めて孤立を恐れず」のスローガンもむなしくはためくばかした。

その東京女子医大の見舞いには井波律子、古川修といった。  
鎌倉の通夜の席で変わりはてた姿に合掌した。  
埴谷雄高が俯き、井上光晴が声を荒げ、大江健三郎は焼香をすませ帰った。  
「ゴメン、あなたには何もいわないで」  
とたか子さんに肩をポンと叩かれ、その場に泣きくづれた。

野辺の送りでその骨を拾った。小田実がそっと話しかけてくれた。  
東京・青山葬儀場で告別式は大勢の人で、全共闘が押し寄せてくるの報に緊張した。そして思いがけぬ姑息な編集者の擦り寄りに、金輪際つきあうのは止そうと思った。

翌年アメリカ帰りの林廣茂と鎌倉に行ったが、たか子さんは位牌もない、禱る手立ては何もないと言った。  
それから 3 年後だったか。  
また林廣茂が「行こう、富士霊園に行こう」と誘ってくれ、二人で新宿から高速バスに乗って向かった。  
墓前に酒をたむけ、号泣し、へべれけに二人で酔った。

忍ぶ会には、3、4 回でかけたが、画策された進行で面白くなかった。  
圧巻の作品集、全集と刊行されたが、文学はブンガクに変容し封印された。

われらの未明の決起も、黄昏の嗚咽も、もはや申すべきことなき無念の山河にまみれたか。  
いや、愚劣極まる作意による虚構の 50 年が潰えさったのだ。

#### 献歌

- ・いささかも慚愧することなきか動乱の夕べ切なく告げし夢はも
- ・さもあらば怒濤にゆらぎほゝゑみてわれらかくあり未明の決起
- ・同士に告ぐ書き急ぎてようつし身のあはれきらめけ夢よ山河よ

――Web サイト「花月流伝」日録 2021 年 5 月 5 日より

■没後50周年 投稿者:藤田伊織 投稿日:2021 年 4 月 19 日(月)10 時 05 分 23 秒 返信・引用

二週間後の五月三日が高橋和巳没度50年ですが、何か記念のイベントなどないのでしょうか？

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■日本のドストエフスキー 投稿者:藤田伊織 投稿日:2021年1月26日(火)17時44分18秒  
返信・引用

日本のドストエフスキーと称された高橋和巳について  
日本ドストエフスキー協会にお送りしたメールです。

-----  
日本のドストエフスキーと呼ばれながらも、世界のドストエフスキーファンはそのことを誰も知らないことが、わかりました。デボラ・マルティンセンさんから次のメールをいただきました。

2021.1.20

Dear Fujita-san

Thank you for sending me this translation. I had not heard of the author. --- (以下個人情報につき省略)

Gratefully,

Deborah A. Martinsen

Dr. Deborah A. Martinsen

Associate Dean of Alumni Education, Columbia College

Adj. Associate Professor of Russian Literature

President, International Dostoevsky Society, 2007-2013

また、Lyudmila Saraskina さんからは、

2021.1.19

Д а , я Людмила Сараскина, специалист по Достоевскому.

Takahashi Kazumi мне не известен, к сожалению.

Е с л и было бы по-русски, прочитала бы. Английский перевод оценить не смогу.  
Удачи.

という、facebook の messenger での知らせをいただきました。

お二人とも、高橋和巳のことは知らなかったとおっしゃっていました。

それも、無理はありません。高橋和巳の作品は、ただの一つも英訳すらされていないのです。そこで、ドストエフスキーや高橋和巳のファンでありますので、「悲の器」を、著作権継承者から正式契約により許諾をいただいて、英訳公開しました。

"Vessel of Sorrow"といます。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

"Vessel of Sorrow" By Takahashi Kazumi

A highly prized Japanese apres-guerre novel published in 1962.

The author was reputed to be a Dostoevsky of Japan. This is a Japanese literature!

実際、高橋和巳は時代も、背景も違いますが、ドストエフスキーに匹敵する小説家であると思います。世界の若い人々が苦しめられている現状でこそ、世界中の多くの人々に読んでいただきたいと思います。

藤田伊織

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■「高橋和巳電子全集」について 投稿者：太田代志朗 投稿日：2020年12月23日(水)18時09分14秒 返信・引用 編集済

2020年——コロナ禍に明け暮れた1年。

未だその終息の見通しもなく、感染拡大、死亡者も増え厳しい状況です。

世はグローバル資本主義に迷走し、言語もメールやSNSやりに流動しつつづけています。

相も変わらず浅学は、高橋和巳のパッケージされた文学と思想を解き放してゆくだけであります。微力ながら、日々つとめています。

頃日、高橋和巳論の一書が日本近代文学館の「高橋和巳文庫」に入ってという意味がわかりませんが、今後もつつましく思索していくことだと思っています。

そして、出版界がコンテンツを紙で伝えることの限界から、新たなデジタル施策を展開。新たな模索が続いています。

こうした中で「高橋和巳電子全集」(実際は「高橋和巳・高橋たか子電子全集」全24巻)が、来年春に小学館から発信の予定です。

小学館はこれまでも、多彩なデジタル文学作品を発信しています。

そうしたラインの高橋和巳を期待していきたく、ここにご案内申し上げます。

よろしくお願ひ申し上げます次第です。

——どうぞ、皆様、よいお年をお迎えください。

■英訳「悲の器」 投稿者：太田代志朗 投稿日：2020年12月21日(月)12時19分56秒

返信・引用

藤田伊織さま

「悲の器」英訳完了、ウェブ公開との由、お慶び申し上げます。

1年間、お疲れさまでした。

ご高見賜りながら、浅学にて何一つお力添えできず心苦しく思います。

広く高橋和巳の世界が読まれることを念じております。

■Vessel of Sorrow 悲の器 投稿者:藤田伊織 投稿日:2020年12月16日(水)13時44分1秒 返信・引用

令和2年12月15日、全32章の英訳をウェブに出すことが完了しました。24日のクリスマスイブには、一括版を公開します。ここまで、1年強かかりました。過ぎてみるとあっという間でした。これから、1冊製本して、近代文学館に納めます。それで、作業は終了です。どれだけ読んでいただける人がいるか、心配ですが、長い目で見ようと思います。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■日録:9月15日(火) 投稿者:太田代志朗 投稿日:2020年9月15日(火)16時29分29秒 返信・引用

晴れ。昼前の公園を60分ウォーキング。

澤胡桃の実をいっぱい拾ってくる。

書庫にいと、なぜかランベドゥサ著『山猫』(河出文庫:1971年)が転がっている。

おいおい、これは何のことか。

このヴィスコンティの映画は誘われ高橋たか子さん(1931~2013)と新宿の映画館で見た。

封切りを見過ごし、澁澤龍彦さん絶賛の映画だという。

世は70年学園闘争に入る前のひとときであった。

シチリアの貴族の壮麗な落日、死と愛の供宴の叙事詩、その大舞踏会の絵巻に酔った。

——いやこれも、秋の幻のかぎりをふぶくセンチメンタル・ジャーニー也。

■Re: 返信御礼 投稿者:藤田伊織 投稿日:2020年7月15日(水)11時43分1秒 返信・引用

> No.164[元記事へ]

藤田伊織さん

1942年12月22日の英文官報に民法の戦後改正が掲載されていて、そこに英訳がありました。それを使うことにしました。結構、違いがあります。

> 太田代志朗さま

> 「第九百七十六条」の件、ご確認ありがとうございます。原作の法文は、漢字+カタカナですが、これは漢字+ひらがなする必要はない、と思料いたします。平仮名になったのは、最近で、この小説の出版時はまだ、字+カタカナでしたし、原作では戦前の六法全書を見ていた、となっていましたから。

> それよりも、法文の漢字+カタカナに対応した英訳ができずに、悩んでいます。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■返信御礼 投稿者:藤田伊織 投稿日:2020年7月13日(月)10時37分22秒 返信・引用

太田代志朗さま

「第九百七十六条」の件、ご確認ありがとうございます。原作の法文は、漢字+カタカナですが、これは漢字+ひらがなする必要はない、と思料いたします。平仮名になったのは、最近で、この小説の出版時はまだ、字+カタカナでしたし、原作では戦前の六法全書を見ていた、となっていましたから。それよりも、法文の漢字+カタカナに対応した英訳ができずに、悩んでいます。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■[ 投稿者:太田代志朗 投稿日:2020年7月12日(日)18時43分10秒 返信・引用  
冠省 コロナ禍の大変な毎日を迎えています。

「悲の器」英訳の件、後半にいたり慶賀申し上げます。

浅学にて何もご協力できませず、お赦ください。

ご指摘いただきました「悲の器」原作の第二十八章、

「死亡の危急に迫った者の遺言」ですが、

これは「第千七十六条」でなく、「第九百七十六条」であることを確認いたしました。

旧六法の原作引用の文章とちがって、その条例も現在は口語体でやさしくなっていることも確認しました。

しかるべく、善処いたすべくとりはかかっていきたいと存じます。

大変、貴重なご高示賜り、ありがとうございました。

■「悲の器」英訳中の質問 投稿者:藤田伊織 投稿日:2020年7月10日(金)13時39分2秒  
返信・引用

引き続き「悲の器」英訳中です。英訳についてではなく、原著の言葉についての質問です。

河出文庫版電子ブック「悲の器」の第28章460ページの最後の部分です。

民法第千七十六条の「遺言」に関する記述がありますが、民法は2006年に改正されておりますが、新旧とも、第千七十六条ではなくて、第九百七十六条のようです。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■「悲の器」英訳中の質問 投稿者:藤田伊織 投稿日:2020年6月11日(木)09時30分5秒  
返信・引用

「悲の器」英訳中です。英訳についてではなく、原著の言葉についての質問です。

河出文庫版電子ブック「悲の器」の第25章418ページの最後の部分です。

規典の発言で;

「だが、名誉(エール)という言葉は、語源的には、ギリシャ語、ラテン語においても、貨幣によってはかられる物質的価値からでているといえますね」

「知っている」と私は語気を強めて言った。

——「名誉」に『エール』が右側に添えられています。「名誉」は

「分配における正しさは何らかの[人の]値打ちに従って定められなければならない、というのは誰もが承認する原則である。」(アリストテレス『倫理』152頁)にある「何らかの[人の]値打ち」に「名誉」が含まれているのだそうです。そうした文献では「名誉」は英語では'honor'オナー、フランス語では'honneur'オヌールです。

しかしながら「名誉」と「エール」の関連は、かなり当たっても出てきません。それで、「エール」は「オヌール」の書き間違いではないかと推察しております。

どなたか、ご教授いただけませんか？

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■井波律子さんのご冥福を祈念します。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2020年5月20日(水)06時34分40秒 返信・引用 編集済

井波津子さんが亡くなられた。

この3月に自宅で転倒し、入院。5月13日、肺炎で逝去。葬儀・告別式は近親者で行ったということだった。

思えば1960年半ば、高橋和巳との「対話」の集まりで、よく会っていた。それは1泊2日の生駒の宿やの“滝まん”だったり、丸山公園の中にある小料理屋での定例読書会であった。京大の院生で、高橋和巳の授業にでている細見の楚々とした風情の方だった。

高橋和巳が下宿で倒れた時はかいかいしく看病していた。

古川修ともども、一緒に大きな花束を持って東京女子医科大学に見舞いにもいった。

金沢大学から、梅原猛先生の推挙で国際日本文化研究センターに赴任。

その日文研を訪ね、3、4回話したことがあった。

昨年末、「高橋和巳電子全集」のことで相談の電話をいれた時、碩学はすこぶる元気だった。

悲しく、つらい。5月青嵐が無情に冷たい。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

■5月、和巳忌に。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2020年5月14日(木)07時47分26秒  
返信・引用 編集済

この春3月、日本近代文学館にいて、高橋和巳の写真アルバムを見てきました。

1歳幼少時から大阪～空襲～疎開の観音寺～松江～京都～鎌倉～東京の数々がありました。

資料で『憂鬱なる党派』の座談会原稿の行方が知れないままで、何とかその手ずるを探していたのですが、「対話」同人で行った座談会をすぐ私が纏め上げたもので、これはもう不可能なことなのでせう。

鎌倉の高橋和巳に50枚原稿を渡したままで、没後の何らかの作意によって破棄されたのでせうからね。

来年は没後50周年、生誕90周年。

日近代文学館の企画展があればいいのですが、そのほうの事案は何も聞いていません。

そして5月、富士霊園を詣でる予定が外出自粛要請でそれもできず、過ごしています。

コロナ禍のかつてない危機感の迫る日々ですが、「殺されてたまるか」と、お互い御身大事にやっけてゆきたく思います。

——どうぞ、よろしく願いいたします。

■「悲の器」の誤植の可能性 投稿者：藤田伊織 投稿日：2020年5月14日(木)07時25分36秒  
返信・引用

太田代志朗さま

「悲の器」を英訳するにあたり、電子本を購入して、そこからテキストを起こし、それで、英訳作業しております。電子本は書籍をスキャンしたままのものを、PDFのようにしているようですから、高橋和巳先生の使う難しい漢字などは、掠れて、拡大してもよくわからない文字があるし、また、色々考えても、書き間違いのような点も見受けられます。せいぜい10箇所未満だと思いますが。今度の電子本ではそのあたり、修正されるのでしょうか？せっかくだから、修正していただけないかと思ひます。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■悲の器 Vessel of Sorrow 投稿者：藤田伊織 投稿日：2020年5月12日(火)10時29分59秒  
返信・引用

「悲の器」の英訳本も小学館で付録みたいにして、電子本で出してはいただけないのでしょうか？何とか、2020年内には完成させますから。今出しているウェブ公開については、著作権継承者から、正式な許諾をいただいておりますが、小学館から出すとなると、別の契約が必要になります。それでも、個人のウェブページだと、どうしてもパブリシティに限界があるので、読んでいただける可能性が小さ

いのです。いかがなものでしょうか？

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■頌春——高橋和巳電子全集 投稿者：太田代志朗 投稿日：2020年1月3日(金)05時58分19秒 返信・引用 編集済  
謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
本年も、どうぞよろしくお願いたします。

没後50年、生誕90周年記念『高橋和巳電子全集』(小学館)が、2021年3月より発信されることになりました。  
実際は『高橋たか子電子全集』とあわせて全24巻、交互にての発信となる。

生き急ぐ殉教の荒野に自己解体していったのだったか。  
いま、ここに高橋和巳が鮮烈によみがえる。  
『捨子物語』、『邪宗門』、『憂鬱なる党派』、『我れ関わり知らず』など初出作も併載。  
独自の編纂により、新たな高橋和巳の世界の魅力をひろくさぐる。  
監修・解題は太田代志朗、このうち中国文学関連(2巻)解説は小南一郎(京都大学名誉教授)。

なお、小学館では充実の編集企画による電子書籍・全集で、開高健、中上健次、澁澤龍彦、小島信夫、福永武彦、宮尾登美子、山口瞳、立原正秋、色川武夫・阿佐田哲也、江戸川乱歩など絶賛好評発信中。

■Vessel of Sorrow Chapter 05 投稿者：藤田伊織 投稿日：2019年12月12日(木)14時24分11秒 返信・引用  
「悲の器」英訳第5章、本日公開しました。今までのところ、月2回、12日と27日に追加できている。でも、全体ではまだ14章がやっと終わったところなので、下手すると、在庫が無くなってしまおう。頑張らねば。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■Vessel of Sorrow Chapter 03 投稿者：藤田伊織 投稿日：2019年11月12日(火)12時41分32秒 返信・引用  
「悲の器」英訳第3章本日公開しました。英語圏の方々に是非お薦めください。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■Re: リンク御礼 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2019年11月3日(日)23時43分52秒  
返信・引用  
> No.151[元記事へ]

> 藤田伊織さん

とんでもございません。困難なお仕事をおつづけになっていることに、満腔の敬意を表したいと存じます。

管理人としても、じっくり拝読したいのは山々なのですが、先々月以来厄介な仕事を抱えておりまして、一日の大半をそれに費やし、それまで読みかけていた小説も放り出したままになっております。あと半年ほど、文学とはほぼ無縁の世界に生きることになりそうですが、いずれ必ず読ませていただくつもりです。

ご翻訳の完成を心よりお祈り申し上げます。

> リンクを張っていただきありがとうございます。月に2回、おおよそ12日と27日の一章ずつ公開していくつもりです。まだ12章を英訳中ですから、頑張らなくてはと思っています。ご感想、ご指摘などいただければ幸いです。

■リンク御礼 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年11月3日(日)22時58分55秒 返信・引用

リンクを張っていただきありがとうございます。月に2回、おおよそ12日と27日の一章ずつ公開していくつもりです。まだ12章を英訳中ですから、頑張らなくてはと思っています。ご感想、ご指摘などいただければ幸いです。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■悲の器 Vessel of Sorrow 第2章 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年10月27日(日)18時02分53秒 返信・引用

悲の器 Vessel of Sorrow 第2章を公開しました。第2章用の表紙も作ってみました。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■『Vessel of Sorrow』のこの返信 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年10月26日(土)22時23分47秒 返信・引用

太田代志朗さま

そう「バッハ 死のカンタータ」を翻訳出版した藤田伊織です。

今は、同じ作家の「モーツァルト・リボーン(仮題)」の校正作業をしています。

どこか出版してくれるところはないでしょうか？

この「悲の器」はウェヴ公開に限ってですが、著作権継承者との契約ができました。

高橋和巳先生だけでなく、辻邦生先生の著作権継承者とのこうした契約ができればありがたいと思います。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■『Vessel of Sorrow』のこと 投稿者:太田代志朗 投稿日:2019年10月24日(木)06時19分27秒 返信・引用

藤田伊織さん

このたびは『Vessel of Sorrow』英訳、おめでとうございます。

著札権もクリアされ、ここにめでたくスタート。心からお祝い申し上げます。

『バッハ死のカンタータ』を書かれた藤田伊織さんですね。

泉下の高橋和巳も、自分の難解な文体を反省しつつ、感動していることだと思います。

当リンクは薄氷堂さんのほうで善処されるようですが、  
広くデジタル企画でも発信できるよう念じおります。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 悲の器 英訳版 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2019年10月14日(月)11時53分27秒 返信・引用

> No.146[元記事へ]

> 藤田伊織さん

承知いたしました。近日中に実行いたします。

■悲の器 英訳版 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年10月14日(月)07時01分56秒

返信・引用

薄氷堂殿

リンクを張っていただけるとのこと、ありがとうございます。よろしく申し上げます。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■Re: Vessel of Sorrow 公開 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2019年10月13日(日)07時  
39分46秒 返信・引用  
> No.144[元記事へ]

?> 藤田伊織さん

どうもありがとうございます。いろいろと面倒な交渉がおありだったとお察しいた  
します。

近いうちに当サイトからリンクを張らせていただきたいと思いますので、どうかよ  
ろしく願います。

■Vessel of Sorrow 公開 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年10月11日(金)13時36分1秒  
返信・引用

日本近代文学館との契約に基づき、Vessel of Sorrow を閲覧できるページ(といっても、初めは第1  
章だけですが)を公開しました。連載小説のように公開してみようと思った次第です。それにまだ第10  
章までしか終わっていないので。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

お知り合いに広報いただければ幸いです。

<http://wisteriafield.jp/vesselofsorrow/vosindex.html>

■ありがとうございます 投稿者:長澤雅春 投稿日:2019年9月13日(金)19時42分36秒  
返信・引用

太田代志朗様の拙稿へのご感想をたまたまネットにて拝見しました。高橋和巳は私にとっても青春の  
一頁でした。その後私は吉本隆明、橋川文三、日本浪漫派と変遷し、現在は朝鮮文学、朝鮮教育へ  
と向かっています。とは言っても私の心情は橋川文三の「日本浪漫派体験は幻影だったのか」という  
心情にシンクロしているような感情に囚われています。青春とは所詮そのようなものだと思いますが、  
それゆえにそのような心情は己れにとって真実であり続けているものだと思います。

日常生活のための仕事に疲れ、かつ妥協の連続の日常において、高橋和巳や橋川文三の思想  
は戦後日本が誇れる最大の良心だと思っています。拙稿を下記のように読んでいただいた太田氏に  
感謝申し上げます。ありがとうございました。

■その書評に敬服 投稿者:太田代志朗 投稿日:2019年8月15日(木)11時52分48秒  
返信・引用 編集済

このほど『社会文学』第50号所載の『高橋の文学と思想——その志と憂愁の彼方に』(コールサック  
社)書評を読んだ。

東口昌央氏よりのメール添付のPDFファイルである。

著者は長澤雅春氏で佐賀女子短期大学教授、専門は日本近現代文学、韓国文化、日本語教育。その深い見識により目配りのきいた纏まりで、本書の全体構成はじめ、各論の深奥をつく流れが脈々としている。

何より高橋和巳文学の理解と研究が現実には深く根ざして並々ならず、いえば自然な新鮮さがそこにはある。

戦後 74 年、没後 48 年——猜疑心の強い学界、論壇などかかわりなく、高橋和巳が新たな波瀾を呼んでいる。

編者の一人として大変うれしく、有難くおもっている。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■「悲の器」英訳のこと。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2019 年 8 月 10 日(土)06 時 56 分 20 秒 返信・引用 編集済

暑中お見舞い申し上げます。

藤田伊織さまの英訳『悲の器』の件、著作権(日本近代文学館)もクリアされ、すみやかな発刊、発信を祈念いたしております。

あの独特のゴツゴツした高橋文体。

思考やら情念やらが、幾重にも蜷局をまいているわけですが、その一つ一つのセンテンスを英訳されるとは、浅学には想像だにできないことでもあります。

「高橋和巳——世界とたたかった文学」との一書がありましたけれど、英訳され、ひろく世界に読まれるようになれば幸いです。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 公開ではなく、関心のある方限定で 投稿者：薄氷堂 投稿日：2019 年 7 月 11 日(木)23 時 08 分 26 秒 返信・引用

> No.139[元記事へ]

> 藤田伊織さん

どうもありがとうございます。

問題は著作権と翻訳権ですが、私は法律については無知なものですから、詳しい方のご意見をおうかがいしたほうがいいのかも知れませんね。せつかくのご好意が仇になってもいけませんし。

もしその点さえクリアになれば、おっしゃるとおり、一章ごとにファイルをダウンロードできるように設定することはよい方法かと存じます。もし藤田様のサイトの容量が足りなければ、当サイト(容量はたっぷりあります)でダウンロード用のファイルをお預かりして保存し、トップページからアクセスできるようにすることは可能です。

■公開ではなく、関心のある方限定で 投稿者:藤田伊織 投稿日:2019年7月11日(木)21時55分39秒 返信・引用

第1章の英訳は一応できましたが、もう少し英文チェックソフトで、誤字や構文のチェックをしないといけません。それをしても出版の場合は、「ネイティブチェック」が必要と言われます。私はネイティブチェックなんていらなと思っていますが、少なくとも最新のチェックソフトで校正します。その後、この掲示板で、1章ずつ公開するのはいかがでしょう。

<http://wisteriafield.jp/wtc1/indexj.html>

■Re:「悲の器」の英訳 投稿者:薄氷堂 投稿日:2019年7月10日(水)21時30分22秒 返信・引用 編集済

> No.137[元記事へ]

> 藤田伊織さん

ご投稿ありがとうございます。

『悲の器』第一章の英訳を終えられたとのこと、感服いたしました。著作権法の改正(改悪?)によって、全訳されてもウェブ公開の見込みがたたないというのは残念ですが、せっかくお始めになったお仕事ですから、原稿が完成したら、それをどなたかに託するという考えはいかがでしょう?

公開するとしてもなにしろまだ先の話ですから、個人に託するのが頼りなければ、どこかの大学の文学部あたりで引き受けてくださるといいのですが……

> いまのところ、高橋和巳先生の作品で英訳されて公開されたものは、調べてもなかった

私も過去何度か検索してみたのですが、どうも英訳はまだないようですね。いまさらいっても詮ないことですが、高橋さんの死が早すぎたことも一因かと思います。

> どなたか、英語圏の方で、高橋和巳に興味をお持ちの方はいませんか?

もし日本の研究者の方で高橋和巳(または現代日本文学)をテーマにしている外国人研究者をご存

じの方がいらしたら、この掲示板を介して、藤田様にご紹介くだされば幸いです。よろしくお願いたします。

■「悲の器」の英訳 投稿者：藤田伊織 投稿日：2019年7月10日(水)17時23分19秒  
返信・引用

昨年の著作権法改正で、著作権の有効年数が没後50年から70年になり、以前は2022年になれば英訳して公開することができたのに、今は20年以上先になってしまいました。私は、2022年を目指して、「悲の器」の英訳を始めていましたが、もうじけてしまいそうです。でも、今日、やっと第1章の英訳が一応終わりました。全部英訳しても、出版の可能性はまるでないので、作者に関心のある方や、研究している方の支援のつもりで、ウェブ公開を目指していました。

いまのところ、高橋和巳先生の作品で英訳されて公開されたものは、調べてもなかったもので、「悲の器」を最初にしたいと思った次第です。

どなたか、英語圏の方で、高橋和巳に興味をお持ちの方はいませんか？

<http://wisteriafield.jp/wtc1/indexj.html>

■そのエピソード 投稿者：太田代志朗 投稿日：2017年10月14日(土)04時54分32秒  
返信・引用

山崎正和オールヒストリー『舞台をまわす、舞台がまわる』編＝御厨貴・阿川尚之・苅部直・牧原出(中央公論社)読む。

幼少時代を始め、京大時代から劇作家デビューとアメリカ出発、70年大学紛争、関西圏に根をおろしたサントリー文化財団設立や80年代文藝ジャーナリズム動向、さらに知識人の政治参加など、その歩みがロングインタビューの記録によって明らかにされる。

演劇活動を基軸にした旺盛な執筆とともに、重厚華麗なネットワークを展開。「サロン形成と自由な社交」により、戦後史の一断面として政治・国際研究・文学・演劇・大学・地域などそのインターディシプリナリティのありやうがよくわかる。

ーかうした中で、その若き同時代感を共有しながら、自堕落な高橋和巳の女問題のエピソードに触れていることも面白い。さもなりなん知の光芒である。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■野際陽子のドラマ初出演は『悲の器』 投稿者：太田代志朗 投稿日：2017年6月28日(水)18時13分31秒 返信・引用 編集済

テレビ朝日系の好評の昼ドラ「やすらぎ郷」(毎週月曜 12:30~12:50)は倉本聡オリジナル作品。

これまでテレビ界に貢献をしてきた役者、監督、脚本家だけが老後に無料で入れる海辺の老人ホー

ムに展開される波瀾の日々が面白い。

先ごろ亡くなった女優の野際陽子が、目下、好演(生前に収録済み)している。

その野際陽子のドラマ初出演は高橋和巳の『悲の器』であった。

1963年7月5日、出演は佐分利信らで演出:大山勝巳、TBS制作。

野際陽子の役は佐分利信の教え子としてで、NHKアナウンサー上りの新人、野際陽子が選ばれたらしい。

当日、高橋和巳は立命館大の文学部専任講師として夜の授業を受け持っていた。

しがって、その放送ドラマは見るができなかった。

高橋和巳は文藝賞を受賞後の多忙を極めていた。

授業はよくサボり、教授会もサボり、文学部長の奈良本辰也は「二足のワラジははける」といい、助教授の梅原猛は何かと激励していた。

高橋和巳の梨木神社脇の研究室や吹田のアパートによくいていた私は、しかとそのドラマを見て、すぐ感想文をしたためておくれた。

後日、「授業がありテレビを見ることができず残念だったが、原作の意をくんだドラマだったと思っている」との返書があった。

今となっては、佐分利信いがいの出演者の記憶はまったくないのだが。

■お礼 投稿者:名古屋市在住63才 投稿日:2017年3月5日(日)19時11分11秒 返信・引用

私の拙い文章に対してご丁寧なおたよりを頂き、ありがとうございました。太田様におかれましては、季節の変わり目、どうかご自愛ください。

■熱い感覚に 投稿者:太田代志朗 投稿日:2017年3月2日(木)15時14分42秒 返信・引用

名古屋からのメール、ありがとうございます。

「高橋和巳短編集」(阿倍出版 1991年)を手にとり、「久しぶりにとても熱い感覚が生じました」とのことと、嬉しくおもいます。

あの短編集は高橋和巳没後20周年ということでまとめられました。

いずれの作品も、高橋和巳が文学デビュー前の同人雑誌に発表されたものですね。

「序にかえて――高橋和巳の小説」として、梅原猛先生が執筆。

小生はその解説「孤高の修羅」を担当しました。

そして、「りっちゃん」であるというのも感激。

懐かしい母校のことば――私は 60~70 年代広小路キャンパス派ですが、激動の時代がよぎってゆきます。

どうぞ、またお気軽にお立ち寄りください。

■感動しました 投稿者:名古屋市在住63才 投稿日:2017年2月15日(水)22時25分45秒  
返信・引用

この度図書館にて「高橋和巳短編集」(阿部出版・1991年5月3日初版発行)を借りて読みました。太田様の解説に感動しました。久しぶりにとても熱い感覚が生じました。これから、私が所有する高橋和巳の全長編をじっくり読み返したいと思います。余談ですが、太田様は、りっちゃんの先輩でいらしたのですね。これもうれしいことでした。とりとめもない内容になってしまい、申し訳ありません。少しでも高橋和巳のファンが増えることを祈って。

■新春をお慶び申し上げます。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2017年1月3日(火)14時52分20秒  
返信・引用

謹んで新年のお祝いを申し上げます。  
昨年は何かとお世話になりまして、ありがとうございました。  
おかげさまで良き新年を迎えることができました。

本年も昨年同様よろしく願い申し上げます。  
皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りいたします

■田中寛氏と打ち合わせ。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2016年12月15日(木)13時31分31秒  
返信・引用

暮れも押し寄せまった。  
12月14日(水)、朝の冷たい雨が昼前に止む。  
池袋に出る。雑司ヶ谷、目白台、SEIB、パルコ、サンシャインシティなど往時茫々。

在外研究でロンドンより帰国した大東文化大の田中寛氏とあふ。  
夏目漱石の足跡をもとめスコットランドまで踏査、その漱石論をしばしうかがふ。

そして昼食後の打ち合わせで、「高橋和巳記念論集」編集につき詰める。  
これまでのピックアップされた論考や資料の検討、  
内容の輪郭・概要はじめ一つの方向性をお互いに確認することができてよかったとおもう。

「誰かがやらねばそれこそ埋もれてしまうばかり、けじめをつけるべき事柄は数多い」  
との言にうたれる。  
大部な高橋和巳資料を整備している君の研究姿勢、その情熱に感服。

不肖は取り急ぎ BBS 配信(第 1 回:2004 年 5 月 17 日～)のものを纏めるべくおもっている。

「三十九歳で早逝した天才作家のあの名作がついに甦る」河出文庫。

『悲の器』が亀山郁夫絶賛、『憂鬱なる党派』を内田樹、小池真理子絶賛、『邪宗門』を佐藤優が絶賛刊行中とは恐悦、慶賀のいたりなり。

■「高橋和巳記念論文集」を 投稿者:太田代志朗 投稿日:2016 年 9 月 5 日(月)16 時 47 分 6 秒 返信・引用 編集済

URL への移転作業も完了、新たな「高橋和巳サイト」の発信、誠にありがとうございます。

容量も増加し、写真や資料の掲載も可能ということで、より充実したサイトを展開していきたいと、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

田中寛氏(大東文化大学外国語学部教授)の提案により、目下、『高橋和巳記念論文集』の編集企画を検討立案中です。

「『高橋和巳没後四五年記念論集』(仮称)の刊行を呼びかけます。

今年 2016 年 5 月 3 日、高橋和巳没後四五回忌を迎えました。

今、高橋和巳(1932-1971)の名を知る世代は減少し、文芸誌にも忘れられた作家、文学者として封殺されています。

最後の思想小説家高橋和巳が日本経済の高度成長期に遺した文学の遺産とは何か。

文学の形態が激しく変容するなか、「文学の責任」とは何か。

——時代の破局の予兆を前に、わたしたちは何を彼によびかけ、何を学び、どう継承すべきか。

ともに議論する場にしたいと念じます。

皆様のご理解、ご支援をお願いいたします。

A4サイズ横書き、縦書きいずれも可。

投稿・寄稿者により四六判縦書き(44字×18行)で 400～500 頁を想定」

『高橋和巳没後四五年記念論集』(仮称)刊行準備委員会事務局

大東文化大学外国語学部田中寛研究室

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560

■URL 移転いたしました 投稿者:薄氷堂 投稿日:2016 年 9 月 3 日(土)09 時 51 分 6 秒

返信・引用 編集済

昨日ご案内した URL の移転作業が完了いたしました。心配していた当掲示板の記事一部消失もなく、まずはホッとしております。

今のところサイト内のリンク切れなどはないようですが、もしお気づきの点がございましたら、どうかご指摘くださいますようお願いいたします。

十年ぶりに公園を歩いたら、昔と同じ場所に同じベンチが置かれていた……とまあ、この掲示板もそんな存在かもしれませんね。しかし歩き疲れた身体にとって、古ぼけたベンチにはいささかの価値があると信じます。

なおサイトの容量が大幅に増加しましたので、写真や資料などをご提供いただければ、サイズを気にせずに掲載することができます。また新しい企画のご提案があれば、微力ながら積極的に対応させていただきたいと存じます。

今後とも高橋和巳を語る会のサイト・掲示板をご利用くださいますよう、よろしくお願いたします。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■高橋和巳を語る会の URL が変更になります。 投稿者:薄氷堂 投稿日:2016年9月2日  
(金)21時11分47秒 返信・引用 編集済  
日頃当掲示板をご利用いただき、厚く御礼申し上げます。

さて Nifty の現ホームページ・サービスが9月29日に終了し、新サービスに移行することになりました。これに伴い、「高橋和巳を語る会」のホームページを近日中に移転いたします。

移転後現在のページにアクセスすると、移転通知が表示されますのでご不便はおかけしませんが、新 URL は下記のとおりですので念のため。(移転通知が表示されるまでは未整備であるため、サイト内でリンク切れ等の症状が出る可能性もあることをお断りしておきます)

<http://hakuhyodo2.art.coocan.jp>

なお当掲示板の URL に変更はございませんが、ホームページ移転後に2015年12月以降の投稿が消えてしまう可能性があります(理由は不明ですが、私個人の HP ではその症状が現れました)。その場合は管理者としてご投稿を復元するつもりですので、あらかじめご了承ください。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■女——文壇的余韻 投稿者:太田代志朗 投稿日:2016年4月3日(日)15時09分10秒  
返信・引用

過去の文壇的余韻を残していた人といえば、我々の同時代でも高橋和巳という人がいました。  
この人なんぞは、半分ぐらいは意図的に自分の女性関係や私生活について語る。  
七〇年安保紛争の最中、早稲田の短歌会に私と高橋和巳で一緒に行ったんです。

(略)壇に上がるなり、

「じつは朝まで女と寝ておりまして、まだ頭がボーッとしているので、ろくなことが言えません」と、始めたわけです。

文士というものは常識があっちゃいけない、まともな社会人であることは恥だ、というような感覚がどこかにあって、その気風がずっと糸を引いて。

山崎正和(『アステイン』78号 2013年5月)  
——丸谷才一を偲ぶ:山崎正和:三浦雅士対談

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■田中博明のこと 投稿者:太田代志朗 投稿日:2016年3月29日(火)20時12分47秒  
返信・引用 編集済

埴谷雄高著『戦後文学と酒』(講談社学芸文庫)の高橋和巳の項に田中博明がでてくる。  
田中博明はわれわれが京都で「対話の会」をやっている頃、夕陽のガンマンがどうのこうのと面白い発想をする男だった。  
京大を出て岩波書店で田中分美知太郎全集の仕事をやっており、アメリカ留学前の林廣茂と三人で神田で2、3回飲んだ。

川越に住んでいるやうで埼玉文芸賞(埼玉教育委員会)評論部門で受賞、パーティで一緒になったこともあるのだが、思へばその後ずっと会っていない。

立石伯(当時法政政大学教授)とは小笠原賢二の通夜に会ったのだが、  
「太田代志朗さんは演劇のほうのことをやっているように聞いていました」  
というのも、悪意のある流れがあったやうで今もって何のことか分からないでいる。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■作田啓一氏逝去。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2016年3月19日(土)05時45分14秒

返信・引用

京都大名誉教授の作田啓一氏が15日、肺炎のため死去。94歳だった。

故人の遺志で葬儀は行わない。

社会意識論や大衆社会論で知られる社会学者で、1969年の京大紛争でエスカレートする暴力に抗議し、

「無力な私は、私自身を苦しめるほかはない」と、2月の厳冬期にハンストを決行した。

もとより面識はないが、書庫からその著書を取り出し合掌。

高橋和巳は『わが解体』でそのストライキのことを痛切に書いている。

学園紛争の対立が激化する中で、高橋和巳は作田啓一のハンストの見舞に立ち寄るが特にいふべきこともない。

妙に見交はす「具合が悪い対面」に終始したのだった。

「オーバーを着たままマットの上に体を傾めに横たえておられたが、憔悴しきった作田啓一教授に学生はやいやいのと語りかけており、そして私にできたことは、自分のとまり込み用の膝掛けを置いておくことしかなかった・・・」と。

知の主流の無力感と苛立ちがにじむ。

高橋和巳は動揺し混乱していた。

この運動のくだらぬことが”肉体的破産”をよぶ。

学校当局や学生との折衝に根もつき、深酒を仰ぎ、嗚咽していた。

それが京都に舞ひ戻った運命だが、いや高橋和巳は移り住んだ鎌倉や東京で文学放蕩に身をやきくづしているべきであつたらうに。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■日録より 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年12月25日(金)18時44分7秒 返信・引用

12月24日(木) 鎌倉散策。憂憤と解体の幻の家よ。

風なく晴天。穏やかな陽射しに誘はれ、ふと思い立って鎌倉散策。

大宮からJR 湘南新宿ラインで1時間。2年振りの町をぶらぶらしてくる。

人で賑う小町通りから鶴岡八幡宮を参詣し、その右回りに道をのぼっていく。

鎌倉市二階堂 748—一首塚の脇にあった憂憤と解体の一軒家。

1971年5月、あの時から私は”黄昏の橋”をじっとみつめてきたのだったか。

往時の面影は何一つなく枯葉が舞ひ、時がむなしく流れる。

いったん瑞泉寺へ向けた脚を返し、人混みの小路の奥の小体の店に入る。

話す相手なく1本空けてでると日がすっかり暮れている。

ークリスマス・イヴ。夜天に月煌々。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■高橋和巳・高橋たか子基金(日本近代文学館)。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年11月19日(木)14時50分10秒 返信・引用

「日本近代文学館」館報第268号(2015年11月15日)より。

高橋たか子遺贈。

「九月四日 故高橋たか子氏より多額の遺贈をお受けした。

これにつき右の理事会(注:坂上弘理事長、荒川洋治、紅野謙介、出久根達郎理事ら)において、2001年度に同氏のご寄付により設立された「高橋和巳・高橋たか子基金」に加えることが決まった。」

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■山崎正和氏の暮らしの光景 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年10月2日(金)19時41分55秒 返信・引用 編集済

戯曲および民芸座公演『世阿彌』(1963)はおもひだすだに感動的だった。

爾来、以来、山崎正和(1934~)著作については殆ど読み、その知見に注目してきている。

同氏は自宅の近くの有料老人ホームに、先住の故谷沢永一氏の薦めにより入居。

最初は別荘代りだったが、今では常住のかたちになっているといふ。

快適なレストランやラウンジ、スポーツ・ジムや温水プール、麻雀・ビリヤード室あり。

大ホールでは合唱の練習にはげむグループあり。

また1フロアを占める大きな病室があり看護・介護師が世話をしている。

ホームの使用権を買ふので所有権はない。

しがって資産は皆無である。

自分の人生は一代限り、住人はさうした決断と覚悟をもっているといふ。

「末期の面倒をかけない」と、「身辺は高齢化社会を絵に描いたような光景」らしい。

碩学の生活はかくありなんか、と思ふ。

ちなみに館内の図書室には、入居者が寄贈した高橋和巳の著作が目立つ。

(資料:日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ 2015』 山崎正和著「ある有料老人ホームの光景」)

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■なぜかマルドロール、栗田勇——平伏せよ人類よ。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2015 年 8 月 27 日(木)15 時 38 分 5 秒 返信・引用 編集済

なぜか『ロートレアモン全集』を読む。

このロマン派の感傷性、高踏派の客観性、象徴派の意識性。

訳は栗田勇、人文書院 1968 年 5 月初版発行。

『マルドロール全集』3 巻は、10 年前にユリイカ書肆よりすでにでていた。

親交のあった A が京大仏文に入るとすぐボードレールの原書に取り組んでいた。

不肖は三流私大の哲学専攻で怠惰の日々をきめていた。

畏友小松辰男(現代劇場主宰)や京大の田辺繁治らが日大芸術学部の連中と『鎖陰』(監督：足立正生)を祇園会館で世にもスキャンダラスな上映にこぎつけやうとしていた。

入浴した寺山修司と河原町の六曜社であったのはその 1 カ月前のことだった。

寺山修司は拙作の戯曲『小喝食』のモチーフから放送劇『海に行きたい』を書き上げていた。

同人雑誌『対話』に入り、私は本格的に小説を書こうとしていた。

なぜか澤田潤(京大仏文、「VIKING」同人)が祇園のクラブによく連れていってくれた。

その流れの中で会った生田耕作に、

「ぼくは高橋たか子の騎士(ナイト)でありまして……」

とぼざく若者に生田さんは黙って酒を注いでくださった。

映画『鎖陰』上映前夜、その上映委員会メンバーから四條の居酒屋”静”に私は呼びだされたのだった。

そこに、おもいもかけず、どういわけか、栗田勇がいた。

熱狂の 60 年代が鮮烈に染めあげる彗星の幻をみるやうなひひとときであった。

さりとして、栗田勇がフランス文学者とし何ほどのことかしていたわけでない。

そして、時は蒼ざめ、巷のほそい迷路をぬけ、酔いどれのやうに流れた。

ミシンと洋傘との手術台の上の、不意の出会いのやうに美しい——世界よ。

——マルドロールの歌の何かも分からぬ老生に、なほも汚辱の詩句がのしかかる。

平伏せよ、人類よ。

血が怒濤となって身体じゆう流れる。

やっと、現実がうつつの夢をやぶってくれた。

栗田勇訳『マルドロールの歌』

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■極私的エロスの遡行 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年8月21日(金)11時25分3秒  
返信・引用

夏8月、終戦記念日がやってくる。

たまたま川村湊著『戦後批評論』(講談社)を紐とく。

冒頭「われらにとって美とは何か」の服部達(1922~1956)のことにふれている。

服部達はメタフィジックな言語論的批評の先駆をなし新進気鋭の若手評論家として活躍。

こうした中で、「現代評論」を刊行する。

同人に奥野健男、島尾敏雄、村松剛、遠藤周作、日野啓三、清岡卓行、吉本隆明がいた。

あはせて進藤純孝の『文壇私記』を読むと、当時の文壇状況がよく分かる。

文芸ジャーナリズムを沸かせた服部達は八ヶ岳山麓において失踪自殺した。

服部達の遺書である「最後の日記」、および村松剛の「服部達のこと」は、

当時右派左派両翼を切って毎号話題沸騰の総合雑誌「知性」(1956年3月号:河出書房)に掲載された。

総合雑誌「知性」編集部には山口瞳、古山高麗雄、竹西寛子らがいた。

だが1957年河出書房倒産により、その「知性」ブレーンを率いて小石原昭氏が知性社、知性アイデアセンターを創業。

現在の知性コミュニケーションズにいたる。

ちなみに京都における放浪苦悶の生活を切り上げた不肖は1968年3月上京、

ここに1995年5月まで糊口を凌ぐ。

激動の日々、文学・文芸主義を断裁した風景に共振することだった。

いや、それこそ酔狂な文学的深層としての反語であった。

言語の美への殉教であり、エロスとしての悲劇的遡行であった。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■極私的戦後批評の風景 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年8月10日(月)21時28分38秒  
返信・引用

夏8月、終戦記念日がやってくる。

たまたま川村湊著『戦後批評論』(講談社)を紐とく。

冒頭「われらにとって美とは何か」の服部達(1922~1956)のことにふれている。

服部達はメタフィジックな言語論的批評の先駆をなして活躍。

新進気鋭の若手評論家として「現代評論」を刊行する。

同誌の同人は奥野健男、島尾敏雄、村松剛、遠藤周作、日野啓三、清岡卓行、吉本隆明であった。

あはせて進藤純行の『文壇私記』を読むと、当時の文壇状況がよく分かる。

文芸ジャーナリズムを沸かせた服部達は八ヶ岳山麓において失踪自殺した。  
服部達の遺書である「最後の日記」、および村松剛の「服部達のこと」は、当時右派左派両翼を切つて毎号話題沸騰の総合雑誌「知性」(1956年3月号:河出書房)に掲載された。

総合雑誌「知性」編集部には山口瞳、古山高麗雄、竹西寛子らがいた。  
だが1957年河出書房倒産により、その「知性」ブレーンを率いて小石原昭氏が知性社、知性アイデアセンターを創業。  
現在の知性コミュニケーションズにいたる。

ちなみに京都における放浪苦悶の生活を切り上げた不肖は1968年3月上京。  
ここに1995年5月まで糊口を凌ぐ。  
激動の日々、文学・文芸主義を断裁した風景に共振することだった。  
いや、それこそ酔狂な文学的深層としての反語であり、エロスであった。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■鶴見俊輔さん逝去一一日録 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年7月24日(金)21時28分  
46秒 返信・引用 編集済

07月24日(金) 鶴見俊輔さん(1922~2015)が逝去された。93歳。  
60年安保、ベ平連と流れる過剰な時代の中で、編集されている『思想の科学』を時々むさぼり読んだ。  
京都に舞い戻って元気な高橋和巳が「鶴見さんをよぼう」といった。  
同人雑誌「対話」の読書会の案内をはかろうとしていた。

そうしたある日、同誌社大学の研究室に鶴見さんを私は訊ねたのだった。  
思想を生きること、文学に殉じることのおおぎょうさとは別に、鶴見さんはソフトに対応してくださった。  
何でも菅野スガなど近代女性史の研究があるのでこのグループに出てきませんか、ともいってくれた。

戦後の知識人としての柔軟なそのりべラルな行動プログラムが時代を切りひらいていった。  
だが、あの時感じた身の温かみやちょっとした仕草のかもしれない優しさこそが、その思想のかがやきであることを若輩はまだ何一つとして知らなかった。  
いや、愚直な文学的幻想とはさうしたものであったのかしれない。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■季刊『悲の器』の創刊準備。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年7月7日(火)18時53分  
13秒 返信・引用 編集済

文藝季刊誌『悲の器』を出したいと思っている。

懇意につきあっている編集者の従容もあって、是非、実現したい。

誌名の「悲の器」はまぎらわしく、おかしいとの1部の意見も聞いているが、これは絶対に悲の器でいきたい。

構想し、考え、不甲斐なく、あれこれ逡巡している。

高橋和巳研究会を各位の了承とともに設立したものの、その後の交流、研究、懇談会など多彩なプログラムを考えながら、何一つ具体化していない。

ひとえに不肖の責任であり、怠慢であり、ここに深くお詫び申し上げます。

季刊『悲の器』は、高橋和巳研究会メンバーの活動や近況の報告をはじめ、高橋和巳にまつわる小論でまとめていきたい、とおもっている。

むろん、同志の参加も大いに歓迎したいし、同志はもとよりわが研究会メンバーである。

悲哀の文学論が、いや何気ない日々の風のそよぎや、四季の花々の香りがつづられればいい。

ここに、お互いの情念の地平を展開していこうでないか。

憂鬱なる党派は解体し、黄昏の橋は崩れ、邪宗の門は永遠に開かれないのだ。

A4判・ソフトカバー、最初は30ページでも、50ページでもいいではないか。

印刷編集費(資金)を用意しようとおもい、非力ながら未だすすまないでいる。

この文学不毛の時代において、われらの情的言語による饗宴をもとう。

各位の同意を得て執筆メンバーについては、広く呼びかける。

諸兄のご協力を切にお願いする次第である。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■哲学、ユーモア、悲劇—一日録6月18日 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年6月19日  
(金)12時24分45秒 返信・引用 編集済

畏友・依田啓一と関西空港ゴルフ倶楽部(18ホール パー72、6310ヤード)をラウンドしたのは、夏の暑い日だった。

前夜の酒席では話しも尽きず、このうえなく楽しいプレーの1日だった。

ドライバーはヘッドスピードがきいて、白球が遠くフェアウェイに転がった。

ホールインワンを3度達成したそのショットは鋭い快音をはなった。

いつでも帰ってこいよ。またやらう、とヤサグレに友はいった。

高校時代からの長いつきあいであった。

家業の模造真珠製造会社を手広く発展させて代を譲り、ライオンズクラブの重責をになっているといふことだった。

ゴルフの会員権はバブル崩壊で1億円近い大損をしたらしい。

プレー後、私は慌ただしく京都へ向かはねばならなかった。

クラブの風呂上りの上気した顔を寄せ、お互い手を振ってわかれた。

ベンツの運転席の日焼した友人の顔はひと遊びしたあとの充足感にみちていた。

その依田があっけなくガンで逝去して10年近くたつ。

空しさがつのる。

空しい風がよぎっていく。

スコットランドやハワイの名門コースの写真入り豪華本を広げる。

苦闘と至福のラウンドが風の匂いにまこじってつたはってくる。

さう、「哲学、ユーモア、悲劇、ロマンス、メロドラマ、交友、有情、へそ曲がり、そして会話が80%、力学・技量が20%」なるゴルフの真義は深い。

Mさん、それでは7月早々の大平台CC。ゆっくりスローバック、スローダウン。

月例のようなかたちになっているが、何とかナイスボギー死守をとねがふ。

――昨日は練習場打ち放し600発。

シニアのドライバーは年々ヘッドスピードが落ちる。

180ヤードでよしとしておかう。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■杉本秀太郎氏ご逝去。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2015年6月2日(火)14時57分33秒 返信・引用 編集済

杉本秀太郎氏(仏文学者)が5月27日逝去された。享年84。

葬儀・告別式は31日、京都・奈良屋杉本家(生家で京都市有形文化財)で。

葬儀委員長は冷泉為人氏(冷泉家時雨文庫理事長)。

杉本さんは富士正晴主宰の「バイキング」同人で、同誌連載中の高橋和巳の『憂鬱なる党派』の文体を徹底的に批判した。

リズムの悪い硬質の漢文調の文体を、悉く一蹴した。

それは同人の会合でも行われ、満座の中で高橋和巳は打ちのめされた。

業を煮やし、高橋和巳はひとり焼酎を飲んだ。

文芸書受賞とともに流行作家となり、その勢いで上京。

念願の作家生活を始めたが、再び京都大学助教授になり、折からの全共闘運動に加担して、高橋和巳は心身ともにボロボロに崩れていった。

1971年5月9日。東京・青山葬儀場で葬儀告別式執行。葬儀委員長＝埴谷雄高。

杉本さんは高橋和巳の葬儀に只一人京都から参列した方だった。

二人の「分けへだてなくお喋りし、酒を飲む日」はついにかなえられなかった。

小松左京ら関西系を切ったたか子さんの願いで、杉本さんが弔辞をよんだ。

その弔辞は、たか子さんのたつての京大仏文の流れへのおもいからだった。

京都系の一部の方は病院に見舞いで訪れ、最後の別れをしたのだが、いづれもこの葬儀には参列していない。

杉本さんは京都に生を享け、京都そのものを肌身にしたフランス文学者であった。

生っ粋の京都人によるその極上のエッセイに胸をうたれた。

私は、杉本秀太郎著『隠された意味』(平凡社)の10枚書評を季刊誌「月光」3号でとりあげていた。

“京棲みのヴォワイアン”の目を感じ入っていたからだ。

伊東静雄、太田垣蓮月、洛中棲息、パリの電球、京都夢幻記など綾と淀みに深くひびきあう文章で、パリと京の匂いに満ちていた。

そして京呉服商奈良屋当主であり、「杉本家住宅」は京町屋の代表例として、重要文化財に指定されている。

富士正晴は京都にくるとこの杉本家に、3日でも4日でも1週間でも気ままに泊まっていった。

また、杉本さんは祇園祭山鉾連合会副理事長であり、祇園祭の維持・継承につとめる旦那衆でもあった。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■1971年5月3日でしたね。 投稿者：齋藤 恵 投稿日：2015年5月4日(月)17時10分3秒  
返信・引用 編集済

高橋和巳氏が永眠されたのは、1971年5月3日(月)午後10時55分でしたね。今から44年前のことになります。

私も記録を保存しておく方でして、日記代わりの当時の手帳を見ましたら、当日は結婚前の妻の実家(福岡県筑後市という、久留米市の近くにある街です)を連休を使って訪れており、当日は久留米の石橋美術館で開催されていた、坂本繁二郎展を見ていました。前年に入社した会社の新人社員の時代でした。

そうですか、あの時、太田さんは軽井沢から鎌倉に駆けつけられたのですか。たか子さんも、今は亡く、当時の関係者も多くは他界しておられますね。でも44年後の今でも、こうしてあの頃のことを心を込めて思い出している方が現実におられるのですから、高橋和巳氏の存在は、やはり大きかったのだと思います。

軽井沢へ行くには、4月半ばくらいまでは、スタッドレスタイヤが必要です。さすがに4月末になると、だいぶ春めいてきます。桜の花は、4月末から5月始めが盛りとなりますから、東京よりも1ヶ月ほど遅いのです。

軽井沢の隣町、御代田(みよた)町に「雪窓(せつそう)公園」という公園があります。最高の桜を、ほとんど人混みナシに見られる絶好の桜の名所なのですが、実は私はそこが大好きでして、今年も4月末に行って来ました。

来年からは、高橋和巳氏の5月3日の命日のことも忘れずに雪窓公園に桜詣でに行き参ります。5月初旬というと、東京ではたいていの人は、もう桜のことなど忘れていた時期ですが、あの地域ではその頃なのです。

あらためて高橋ご夫妻のご冥福を祈らせていただきます。和巳氏が、もしも今でもご存命でしたら、今年84歳になられていたのですね。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■和巳忌——2015年 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年5月4日(月)14時18分58秒  
返信・引用 編集済

あの時、軽井沢から急いで帰ったのだった。

つましい生活の日々。所帯をもち生きていくのに精いっぱいだった。

京都の流離の日を切り上げ、上京して3年目。

南浦和の安アパートから新座の公団住宅に移ってまだまもなかった。

高度成長にわき、サイケデリックな都会に夢を抱きながらも疲れていた。

マスコミ・出版・宣伝 PR の世界の周辺で、分を秒にきざむ日々だった。

まだ子供も小さく、妻のお腹には二人目の子が宿っていた。

高原の夜は寒く、つかの間の休暇のひとつきだった。

書くものは実をなさず、生業のあわただしさに身を削っていた。

文芸誌「新潮」から連絡があり、一作(100枚)を送った。

「急がないように」と編集者にいわれ、掲載は見合わせられていた。

二作、三作と書いて送るべきを、あえいでいた。

頓挫していたのだった。

「いいか、雑文は書くな。真剣に取り組み。文学するとは一寸釘を身体に打つようなものよ」

そういわれ、何一つ、まだなしえていなかった。

生活に追われていたのだろうが、それが理由にならない。

この1年、高橋和巳が危ないという噂は流れていた。

東京女子医大へ井波律子、古川修と見舞いにいったが、たか子さんにお会いするだけだった。

後日、「よければ、いらっしやい」と、

たかさんにいわれたが、なぜか行くのをためらった。

それがお別れを意味することを私は知らなかった。

――軽井沢から鎌倉へ、急ぐ心を抑へ、動転しながら向った。

滂沱の涙が流れた。

「ゴメン。あなたにはほんとのこといわないで」

鎌倉の通夜、たかさんは、私の肩をたたいていった。

棺の前で埴谷雄高、井上光晴さんらが何か話していた。

斎場でとりあげた白骨に無情の鐘が鳴った。

バッハの無伴奏チェロ・ソナタ。

あの重々しいチェロの独奏――東京・青山斎場における葬送曲。

会場には全共闘の学生が大挙駆けつけるのでないかと、一時、騒然となった。

京都勢では杉本秀太郎氏がみえ、弔辞をよんだ。

流れていった年月のことをよくかんがへる。

いや、すべては用づみの舞台装置のように霞がかっているといふに。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■京都のこと 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年4月25日(土)18時53分33秒 返信・引用 編集済

初夏のまぶしい日差しに躑躅が咲き乱れています。

ちょっとこのところ多事多情の日々にて掲示板を失礼していました。

斎藤恵さんは京都の春を満喫され、よかったですね。

「都をどり」のこと、多角的に考察され、大変興味深く感じました。

私事、もう随分「都をどり」はいったことなく、忘却の彼方になっていました。

ふと、華やかなひとときのことをおもいだしています。

顧みれば、友人たちはいつもあの舞台の照明の仕事に当り、会場整理の手伝いをしていました。衣装合わせから半月以上のお稽古、ほんまの楽屋化粧風景をのぞかせてもらったこともあります。そうそう、いただいたお弁当のおいしかったこと。

お弁当は菱岩、いやうどんは祇園や宮川町の仕出し屋のものがわすれません。

ヨーイヤ、セイで始まるあの何ともいえぬ舞台。

1960年代のことで、舞子はん、芸妓はんに指導していたのは猪熊兼繁氏(京大教授)でしたね。

私はあの舞台の台本(脚本・構成)を書くべく奔走(?)したのです。

が、もとより吉井勇や谷崎潤一郎の文才なく、地唄舞のお師匠さんの名ざしで台本3本、武原はんの「雪」を真似てつくったりしていました。

友人の家のお茶屋に籠って、朝4時に明ける銭湯「桜湯」をまって遊びふけていましたからね。

京都花街文化史も古都の雅な一端、紅袖しずかに凭(より)、花柳の風流あまねく遊人に付す。

私には旦那衆の粋はもとより分かりませんが、京都はいろいろ楽しいところですね。

老舗旅館「炭屋」の先代は堀部公允さんで、もともと私の高校の自由科選択の演劇の先生でした。

炭屋主人になられてからは裏千家老分を勤め、また師走をかざる京都「素人顔見世」の「助六由縁江戸桜」の助六は水もしたたる好演技で沸かせました。

そして不思議に、今、なぜか若い母とあの高雄の神護寺の石段を一つ一つ歩いていく情景がおもいおこされてきます。

紅葉の舞う時節だったか。

いや、あれは母が白いパラソルをさしていたときだったか。

なぜか、そこでは、幼少の私は母の悲しみを不思議に感じいつているのです。

また東京三宅坂の国立劇場で毎年開催の「京舞」もいいものですね。

井上八千代一門がやってきて、よく声をかけられ、いつていたものです。

あの劇場ロビーからはお濠の常盤の緑の松が見え、京ことばでいっぱい華やかなひとときです。

一一とりとめなく書きましたが、ご容赦ください。

ちなみに、高橋和巳がつかっていたお茶屋は祇園の「岡あい」でした。

何と時の流行作家は37、8歳でお茶屋通いをしていたのですね。

こじんまりしたお茶屋で、私はそのお座敷で泥酔した高橋和巳を目の前にしています。

「おい、いいか。お前にはこのお姐さんの美しさがわかるか」と芸妓を引き寄せいうのです。

多田道太郎さんら京大系の先生がつかっていたようですね。

梅原猛、小松左京が全共闘運動にのめり込む高橋和巳を心配して説諭し、逆に「何をいつとるか」と厳しく攻められたのもこのお茶屋でした。

後年の京巡りで嵐山吉兆始め、いろいろなところへいき楽しくやってきました。

友人たちと会えば酒盛りだけで激論・激闘で2日、3日、たちまち過ぎてゆくのです。  
日本ペンクラブの京都フォーラムも関係各位の協力で盛大に開催できたのでした。

料理関連で菊水、瓢亭、魚新楼、菊之井、竹茂楼、たん熊北店、土井、千花、大市その他で堪能してきました。

さりながら、私には錦市場や出町の枳形商店街の鯖すしが何よりの好物です。

昨今、祇園の丸山など評判ですが、さてどんなものなのでしょう。

今度いったら、円山公園の奥にある旅館「井雪」に是非泊まろうとおもってまだはたしていません。

が、やはりあの「岡あい」のことが何と言っても忘れることができません。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■白虹 投稿者:齋藤 恵 投稿日:2015年4月18日(土)16時40分48秒 返信・引用  
花街の祭典、「都をどり」から、突然、テーマが変わって恐縮ですが、そのような多面性を持つ者のワガママと、どうかご容赦ください。

昨今の政権与党による報道機関に対する猛烈な圧力を見ながら、私は日本はとうとうこういう段階に来たのかと、あらためてハラを決めています。報道機関は政府による許認可事業ですから、廃業も含めて、権力者ならどんな圧力でもかけられるのです。でもだからこそ、戦前の悲惨な状況を再現させないために、報道の自由や、放送法が制定され、時の権力者に不都合な事実でも、事実である限り、国民に知らしめる自由を報道機関に保障してきたはずでした、少なくとも表向きは。

それを破廉恥にも、堂々と壊し、情報操作によって国民の意識を権力者の都合のよい方向に向けようという企みを、今や隠そうともしなくなっているのです。私見ではこれは原発の再稼働と同じくらい危険なことだと思います。そしてそんな状況の中で、私が今思い浮かべているのは、「白虹事件」のことです。

「邪宗門」の第24章で、「ひのもと救霊会」は半ば偶発的な事件をきっかけにして全面蜂起するのですが、その章を高橋和巳氏は「白虹」と題していました。

漢文で「白虹日を貫く」と言うと、それは国の大乱、革命を意味するのだそうですが、氏はさすがにその分野の専門家ですね。たいへんふさわしく、しかも魅力的なタイトルをつけたと思います。

その「白虹」を事件名にした「白虹事件」とは、今から97年前に起きた、政府による悪質な言論弾圧事件です。現在の日本社会のありようと、政権中枢に居る人々のやり口を見ていますと、ぞっとするほど類似していますので、ここであえておしゃべりさせていただきます。

話は、1918年(大正7年)にさかのぼります。大正デモクラシーが頂点を極め、前年秋のロシア革命

が、世界中を震撼させていた時期のことです。

1918年8月、シベリア出兵をあてこむ米の買占めによって米の値段が暴騰しました。あまりの不条理さに、富山県の漁村のおかみさん達が暴挙して米屋におしかけ、打ち壊しを始めたことに端を発した「米騒動」は、たちまち全国に広がりました。

東京・大阪・神戸などの都市では焼き打ち、強奪の大暴動となり、政府は警察だけでなく、軍隊までも動員して、力づくで事態を収拾しようと懸命でした。

時の首相は、長州閥、陸軍出身の寺内正毅でした。内閣は暴動拡大防止を理由に8月14日、米騒動に関する一切の新聞報道を禁止しました。報道の全面規制です。

それに対して、新聞記者側は全国的に呼応して「禁止令の解除」および「政府の引責辞職」を要求し、記者大会を開きました。8月25日に開かれた関西記者大会には、九州からの出席もふくめて86社、代表166名が参加し、それぞれ強く政府を弾劾しました。

大阪朝日のその日の夕刊には、大会の記事が掲載されましたが、その中に「白虹」という言葉がありました。

『「白虹日を貫けり」と昔の人が呟いた不吉な兆しが……人々の頭に電の様に閃く」という文章です。そしてその一節の前には、「我が大日本帝国は、今や怖ろしい最後の審判の日が近づいてゐるのではないか」とあったのです。

かねてから言論弾圧の機会をねらっていた、寺内政権は絶好の機会とばかりに、ここで一挙に攻撃に出ました。朝日新聞の報道を「朝憲紊乱罪」(天皇制国家の基本法を乱す罪)という当時最大の罪にもあたるとし、新聞紙法違反により、これも最強力の罰則である「発行禁止処分」、つまりは廃業、会社解散に追い込もうとしたのです。

当時は稀代の悪法、治安維持法はまだ成立していなかったのですが、そのわずか7年後の1925年(大正14年)には、政府は治安維持法を強引に成立せしめ、1928年にはさらに改悪して、恐怖政治の道具として大いに濫用しました。

検事局は問題の記事の筆者である大西利夫記者と編集兼発行人の山口信雄氏を起訴し、各6ヶ月の禁固刑の上に、朝日新聞の発行禁止処分を求刑しました。右翼のボス達の組織である大同団結浪人会は、朝日新聞を「非国民」と断じて、その処分に関して司法権を監視すると決議しました。

朝日新聞の村山社長は、当局に対して監督不行届きを陳謝し、社内の肅正を誓いましたが、9月28日、新聞社からの帰途、大阪・中之島公園内で数名の暴漢に襲われました。

乗っていた人力車は転覆し、村山は暴漢に杖でなぐられたのちに「代天誅国賊」として布切れを首に結ばれ、石灯籠に縛りつけられました。

暴漢たちは、「檄文 皇国青年会」と記した印刷物数百枚などを現場にのこして逃走しましたが、その後の調べにより、黒龍会の所属であったことが判明しました。

結局、寺内内閣は9月のほぼ同時期に退陣し、9月29日、原敬が首相兼法相となりました。原は郵便報知新聞の記者から大東日報の主筆をへて外務省に入った経歴の持主であり、その後にもまた大阪毎日から請われて契約社長に就任したことさえあるという、新聞界を熟知した人物でしたので、かえって新聞操縦術にたけていたと言えるのかもしれませんが。

村山朝日新聞社長は、原を訪れて寛大な処置をもとめ、編集首脳とともに自分も辞任することによって、朝日新聞は「発行禁止」、つまりは廃業をまぬかれました。

原は朝日新聞新社長の上野理一を電報で呼び寄せ、鈴木司法次官立会にて決意をたしかめ、起訴された社員に対して、判決には控訴しないよう説得することまで約束させました。

この会談の3日後にあたる12月4日に、2人の被告はともに「禁固2ヶ月」を言い渡されましたが控訴せず、朝日新聞は発行禁止処分＝廃業処分を受けなかったのです。

政府の理不尽を弾劾する新聞記者の大会を開催できるような社会的環境が、かろうじてでもあった時期から、ほんのわずかの間に、全国の新聞は、朝日新聞が受けた脅しに震え上がり、メディア本来の役割を放棄することになったのです。

流れは始まるとあっという間に奔流になります。甘く見ていると、いつの間にかとんでもない事態になってしまったという事例が、近現代の世界の歴史にも、わんさとあります。だからこそ、私達は実際は何があったのかをよく知るべきですし、知る努力をするべきだと思います。

本来は、美しい、夢の架け橋であるはずの「虹」から、こんなことを連想しなければならないのは、私自身にとってもたいへん悲しいことですが、「白虹」の彼方には、なしくずしの戦争と悲惨への道が開かれていったのです。どうかご記憶ください。

最後になりますが、この記事の筆者であった大西利夫氏(偶然ですが、大西氏も高橋和巳氏と同じく、大阪生まれで、京都大学文学部のご出身でした)は後年、こんなふうに語っておられました。ちなみに氏は朝日新聞を退職させられた後は、松竹株式会社(株)に拾ってもらい、脚本家として戦後まで生き延びました。没年は1977年、88歳でした。

「白虹事件というのは、日本の言論史の上でかなり大きな意味をもっておりまして、『朝日』もこれ以後

変わりますし、他の新聞も、うっかりしたことは書けん、というように……。

そうなんです。その時の『朝日』のあわて方もひどかったんです。天下の操觚(そうこ)者[言論機関]を以って任じ、一世を指導するかのように見えた大朝日も権力にうちひしがれて、見るも無残な状態になる有様を私、見たような気がして、余計ニヒリスティックになったんです。世の中のこと、すべていざという時には、こんなものか、というのが若い頭にピシと入った。これはいまだに入っています。」

報道の現場にいる数少ない心ある人達は、今どう考えていることでしょうか？

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■都をどり 投稿者:齋藤 恵 投稿日:2015年4月17日(金)22時21分7秒 返信・引用 編集済

私の拙い書き込みが、敬愛する太田さんにある種のプレッシャーをおかけしていたなどは、つゆ知らず、申し訳ないことをしました。ごめんなさい。当の私はいいい気なもので、4月1日から妻と2人でしばらく京都に花見に出かけておりました。ついでに祇園町の芸舞妓衆による「都をどり」も楽しんで参りました。祇園町は、晩年の高橋和巳氏もよく訪れた花街(かがい)だと聞きます。でも氏は、「都をどり」などはご覧にならなかったでしょうね、きっと。

私は妻に連れられて初めて見たのですが、いわば日本舞踊の発表会のようなものですから、観客はほとんど女性かと思っていたのですが、さにあらずでした。意外と男性客が多かったのには驚きました。まあチケットが芸妓衆や、お茶屋筋から出回るわけですから、出向かなければならない義理のある男が多いということでしょうか？ 私も積極的に見に行っただけではありませんが、見るからに、義理で見に来ている風情の男達が私の他にも、けっこう居ましたよ。

ところで「都をどり」は、今年が143回目なのだそうです。明治初期、東京遷都の影響で寂しくなってしまった京都を盛り上げようと、明治5年(1872年)に祇園町が始めました。毎年4月に開催されるのですが、(現在は4月1日から30日間ぶっとおし)、もしも年1回だけ休みなく開催されていれば、今年には144回目になるはずだと、(2015マイナス1871ですから)、つまらない数字について関心を持ってしまふ私は、当日会場でもらったパンフレットを繰ってみました。

そうしたら、やはりここにも戦争の影が残っていました。1944年(昭和19年)から1949年(昭和24年)までの6年間は、戦争のせいで、さすがの祇園町も「都をどり」を開催できなかったのです。でもそれではまた開催回数が合わなくなってしまうと、さらにパンフレットに目をこらしたら、大正天皇即位だの、昭和天皇即位だのという「御大典奉祝記念」とか、「東京オリンピック開催記念」などの追加開催で年2回やったことが何度かあったのです。それでこういう回数になったことが判明しました。

花街の祭典ですから、京の雅や四季の美しさを讃える演題が多いのは当然ですが、昭和13年以降、

18年までの歌題は、今にして見れば笑ってしまうようなお題目でしたので、ちょっとご紹介させていただきます。まあ当時は必死の思いで、こんな歌題をつけたのでしょね。そうしないと、お上が開催を許してくれないだけでなく、「国家の非常時に、そんな贅沢遊びをするのは非国民だ！」などと本気で言って圧力をかける輩が大勢いたのでしょね。

昭和13年 旭光遍輝  
昭和14年 建武の源  
昭和15年 輝く聖蹟  
昭和16年 旭光耀海洋  
昭和17年 御国の誇  
昭和18年 皇国のみやび

ちなみに、143回目の今年の歌題は、「花都琳派染模様」というものでした。狂気の軍国主義が国中を覆い尽くすまでは、だいたい今年のタイトルと同様なものでしたよ、当たり前のことですが。

日本舞踊には、さして関心を持っていない私でも、やはり見事な舞台だと思いましたので、きっと水準は高いのだらうと思います。

ところで、会場は「祇園甲部歌舞練場」という、建仁寺の近くにある会館なのですが、収容人数をカウントしてみましたら、イス席が698席、それに栈敷席が24ありました。栈敷席はけっこう大きなものがありますので、1栈敷5人平均としても120人分くらいは入ります。

そうすると、総収容人員は少なく見ても約800人。それを1日4回、ほぼ満席にします。このあたりが、祇園町という花街の底力なのでしょうね。ということは1日にほぼ3千人として、30日間で9万人が入場料を払って見に行きます。

入場券は、2500円の自由席式等観覧券、4200円の指定席壺等観覧券、そして4800円の茶券付特等観覧券の3種類がありました。平均を少なく見積もって3500円としても、1日の興行収入は1050万円。30日間の合計は、ざっと3億円ということになります。うーん、祇園町、畏るべし。

という次第で、太田さん、私はこんな俗物ですから、どうかあまりお気になさらぬよう。これからもよろしくお付き合いください。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■春日憂愁 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年4月16日(木)22時45分36秒 返信・引用

当地では花が散り、春の夕べの酒はまたひと味ちがいますね。  
お互い花の時節にそれぞれの楽しみ、歩みがあったことでしょう。

この掲示板で「太田さん、お互いにハラをくりましょう」と真っ向からいわれてたじろぎ、また五山の送り火の戦時中の「白い大文字」に、「いかがですか？」とつきつけられて、とまどっていました。  
まったく年甲斐もなくうろたえていました。

60年代トロッキストの周辺でオダをあげ、暑い夏の京都では嵐山に泳ぎにゆき、或いは市内と10度ちがって涼しい貴船にいて昼寝。

いやあの厳寒の冬に耐えて、死ぬ思いで勉強したのです。

その後の京都はもう巨大なテーマパーク。いろいろなお人に来てもらうて、たんと気張ってくれたらよろし。

気ままに極私的文学論をつらぬくしかありません。

一一ってこれも、また一つの逃げ口上でしょうし、ろくでなしの人類が切り込む政治であり文学のエントロピー。

そう、9・11以来、“民族と宗教”の戦争が始まったのであり、それが第3次世界戦争という人もいますようですね。

とまれ、八重の花が咲き始めました。

憂鬱なる党派が解体され、今少し思想的、美意識的に明け暮れ、加えて行動的に自己演出するものだいじなことだと思っているところです。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: お世話になります。 投稿者:薄氷堂 投稿日:2015年4月1日(水)08時46分24秒  
返信・引用

> No.98[元記事へ]

齋藤 恵さん

どうもありがとうございます。こちらこそよろしくお願ひ申し上げます。

齋藤さんのサイトへおじゃまし、「清閑寺」の記事などを拝読いたしました。  
第一印象だけで満足してしまう私とはちがって、なにことも深く考察される姿勢には深い敬意を感じます。これから記事を少しずつ読ませていただくつもりです。

> 私は明日から妻と共に、また京都へ出かけます。京都はわずかばかりでもお金

を持って、カモになりに行くには最高の場所ですね。

どうか存分にお楽しみください。

京都はお金がなくとも(あればもちろん結構ですが)むやみに歩き回るだけで楽しめる町だと思います。ただし個人的には、一住民として暮らすのはちょっとしんどいかなという気もいたします。特に東えびすの一人としては……

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■お世話になります。 投稿者:齋藤 恵 投稿日:2015年 3月 31日(火)10時 39分 24秒  
返信・引用 編集済  
薄氷堂さん、早速のコメント、どうもありがとうございました。

太田さんのご縁から始まって、これまではまったく存じ上げない方々と、こうしてご縁を持たせていただき、ありがたく思っております。これからも、この掲示板でお世話になりますが、どうぞよろしく願いいたします。

薄氷堂さんのサイトを少し拝見したのですが、ずいぶんと奥行きのあるサイトですねえ！京都に関することだけでも、内容豊かなページが続き、ついつい引き込まれて見させていただきました。学生時代を京都で過ごされたのですね。

たまたまですが、私がよく存じ上げている方々の中に、北海道のご出身で京都にある大学で4年間を過ごされた方が二人おられます。その方々は、結局北海道には戻らずに、東京で人生を過ごされたのですが、お二人とも、たいへん好人物です。両者共、私よりも年齢が少し上ですので、北海道から京都に出られたのは昭和30年代でした。学生時代の4年間に、郷里へ戻ったのは1~2度だけだったとお二人とも仰っておられました。当時は費用的にも時間的にも、現在よりもはるかにオオゴトだったはずですね。

そんな思いをして過ごされた京都ですから、懐かしさもひとしおのことと思います。太田さんや高橋和巳氏は、関西のご出身ですから、このあたりの感覚は私達とは少し異なるかもしれませんね。

私は明日から妻と共に、また京都へ出かけます。京都はわずかばかりでもお金を持って、カモになりに行くには最高の場所ですね。でも私のような関東の人間が、あそこで仕事をしてお金を稼ぐのは至難のことに思えます。

またこれからも、よろしくお付き合いください。お世話になります。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■Re: 白い送り火 投稿者:薄氷堂 投稿日:2015年3月30日(月)21時43分17秒 返信・引用

> No.96[元記事へ]

> 齋藤 恵さん

いつもコメントをお寄せくださりましてありがとうございます。ほんとうに管理しかしていない不勉強な管理者ではありますが、今後とも当掲示板をご利用くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

> 「白い送り火」は、もう2度と再現させてはならないと思います。

おっしゃるとおりだと思います。このところ自由にものをいいにくい気分が蔓延する一方で、空疎なことばが飛び交い(よりもよって八紘一字とは……)、ひょっとして21世紀に白い送り火が再現するのではないかとさえ危惧しております。

> 東山如意ヶ嶽の火床に登る道は、けっこう険しい山道で

如意ヶ嶽は標高472mだそうです。山は低くても山、あなどれないものですね。私などは、京都ではただひとつ瓜生山(標高301m)に登ったきりですが、夏の最中だったせいもあり、すっかりへばってしまった覚えがあります。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■白い送り火 投稿者:齋藤 恵 投稿日:2015年3月30日(月)20時52分54秒 返信・引用

京都とはご縁が深かった高橋和巳氏の作品の中に、私の知る限り、毎年8月16日に京都市内で行われる「五山の送り火」のことが出てきた記憶はないのですが、太田さん、いかがでしょうか？

「日本の悪霊」の中で、村瀬狷輔達の一団が、北白川在住の山林地主を襲って強盗殺人を犯した日は、祇園祭りの夜でしたね。五山の送り火の日ではありませんでした。

実は私はあの送り火には、けっこう興味を持っておりまして、火床(ひどこ)を見るために東山如意ヶ嶽に登ったり、長年の間に、いろいろな経験をして参りました。そんな中で偶然見つけたのが、下の写真です。五山の送り火の写真としては見るからに異質ですが、これは、1943年(昭和18年)8月16日朝の「白い大文字」です。たいへんめずらしい記録写真です。これも私の経験だけで恐縮ですが、

このことは京都にお住まいの方々もほとんどご存じないようです。太田さんはいかがですか？

実は五山の送り火は、太平洋戦争中、1943年(昭和18)年から3年間だけ、京都の夏の夜空から消えたのです。(この点からも戦争は罪深いことでした。)

戦況が悪化してきた1943年、召集されて男手が足りなくなり、空襲に備えた「灯火管制」も厳しくなり、そして何よりも貴重な資源である薪を、そんな目的には使えなくなったため、送り火は中止されました。室町時代中期(14世紀末から15世紀初め)くらいに始まったとされている長い歴史を持った仏教行事を、とうとう続けることができなくなったわけです。

以来、1945年(昭和20年)の敗戦までの3年間は、この送り火は行われず、再開されたのは、1946年(昭和21年)8月16日でした。

送り火に代わって、1943年、44年の2年間、8月16日の朝、如意ヶ嶽に現れたのが「白い送り火」でした。1945年は、敗戦放送の翌日でしたから、さすがにそれもできなかったのです。

昭和18年、19年の2年間だけは、地元の国民学校の児童と一般市民の合計約800人が、白いシャツを着て早朝の火床まで登り、午前7時から、人文字で「大」を描き、ラジオ体操を奉納したのだそうです。当時の新聞の見出しは、「英霊を送る・・・」だったそうで、すべてが戦争へと収斂されていたのです。

「白い送り火」は、もう2度と再現させてはならないと思います。2年間だけ見られた貴重な記録を見つけたものですから、そうした祈りを込めてご紹介させていただきました。

東山如意ヶ嶽の火床に登る道は、けっこう険しい山道で、もう少し若かった私の足で40分かかりました。あの時代、空きっ腹の800人には、さぞかしきつい山登りだったと思います。送り火はやはり、夜やるべきものですね。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■諸君、死なないで呉れ！ 投稿者：齋藤 恵 投稿日：2015年3月28日(土)19時33分46秒 返信・引用 編集済

高橋和巳氏は、1931年(昭和6年)の大阪生まれでしたから、敗戦時には14歳でしたね。大阪大空襲のため実家の家屋も工場も焼失し、かろうじて生き残った廃墟の中での体験が、太田さんが度々引用しておられる「褐色の憤怒」の原体験ではなかったかと、私は思っています。

いささか長くなりますので恐縮ですが、以下にご紹介するのは、私の母校の同窓会誌に、10年以上前に掲載された戦中派の卒業生が寄稿された一文です。この方の文章は、なぜか私の心を打つも

のがあり、捨てられずに切り取って保存しておきました。1944年(昭和19年)に大学に入学された方ですので、今もご健在であれば、もう90歳前後になられると思います。もちろん私はこの方と面識はないのですが、太田さんも憂えておられる現在の日本社会の有様を考えると、この一文をご紹介させていただきたくまりました。

引用した文章は一部割愛しておりますが、私が付け加えたり、書き変えたりは一切しておりません。ただし文中に登場するお名前だけは、イニシャルにしました。私にとっては凜とした、古典的な言い回しもあります。

『私は昭和19年に入学した者であるが、以下に記すことは、同期の多くが共有する貴重な体験である。

昭和19年10月、戦局は日々我が国に不利に展開、軍官血道をあげての戦意高揚宣伝にも拘わらず、国民に暗い陰をなげかけていた。「撃ちてし止まん」が何時しか「一億玉砕」に変わっていた。

既に通達により、校内での学生の集会在禁止されているようなこの時期に、講堂において本校学生による出征学徒壮行会が開催された。前年度の学徒出陣、徴兵繰り上げによる応召、学徒動員等により、学内の学生数は激減し、校舎は閑散としていた。それでも動員先より作業衣のまま参集した学生も多数見えて、当日は極めて珍しく、講堂の座席は八割方も埋まる盛会であった。

二、三の教授の壮行の辞に続き、Y教授が演壇に立たれて、第一声が力強く放たれた。「諸君、どうか死なないで呉れ！」

一瞬私は自分の耳を疑い、場内は水を打ったような静けさになった。戦場で君国のために死ぬことが、日本男子の最高の名誉と賞賛され、生きて帰るなどとは口が裂けても言えない時にである。教授は続けられた「今や世の中は真におかしくなっている。一億玉砕などと叫ばれ、街には死にたがっている者があふれている。死にたい奴には、死なせたらよい。しかし、諸君には生きていてもらわねば困る。国民が死に絶えた戦勝国など考えられるだろうか？ 戦争に勝っても負けても、国家が直ちに必要とするのは諸君なのだ。生きるためには、前に進めと言われたら、後ろに下がることは考えられぬものだろうか？ 右に行けと言われたら、左に行くことは考えられないものだろうか？ どうかあと2年、いや時局下2年が無理なら、1年でも何とか生き延びる方法を考えてもらいたい。その時間稼ぎのためには、幹部候補生志願でも何でもよい、ぜひ方法を考えて欲しい。」これだけのことを言われて、教授は降壇された。会場は肅として声もなかった。

学生の答辞はなく、壮行の辞に引き続き、Hさんがピアノを演奏した。そして演奏を終えるや自ら進んで演壇に立ち「本日は思いもよらぬ、こんなすばらしい会にお招きいただき感激しております。ただ今は戦に向かう若者の情熱を讃えたショパンのポロネーズを演じました。行く日があれば、必ず帰る日もあるはずです。ご凱旋の時には、是非ともまたお招きいただきたい。皆様お健やかに……」と挨拶

拶された。両手を前に固く結び、両眼よりとめどなく溢れ出る涙は、頬を伝って流れ落ちた。

実は当時伝え聞いたところでは、Hさんは初め出征壮行会なら出演しないと固持されたが、ベヒシュタインのピアノ(当時日本に3台しかないと言われたドイツ製の世界的名器)があると聞き、まさかと驚き、それではそのピアノを弾かせて頂くためということで承諾されたとのことであった。当日駅に降り立った彼女は、思わず昔過ごしたウイーンの森を思い出すと云われたことが印象に残った。

中学時代に軍国少年として徹底的な教育を受け、その時1年生だった私にはY教授の壮行の辞は、非常に重大だが、何か聞いてはならない恐ろしいことを聞いてしまった思いであった。翌日には、早速憲兵が来校、壮行会に出席した学生にY教授の話の内容を聞き廻っていた。

その後11月には三鷹の中島飛行機工場が空襲で大きな損害を受け、翌日には腕章も物々しく憲兵が数人学校に現れ、続いて軍人先導で工作機械類がトラックで次々と運び込まれ、講堂は一夜にして軍需工場と化した。そこに置かれていたベヒシュタインも急遽片づけられた。

私はその後まもなく現役応召で満州国境守備部隊に配属され、20年8月ソ連軍の怒濤の侵攻に玉砕隊も出たが、辛うじて生き延び、終戦とともにシベリアに抑留され、炭坑苦役1年半、22年春に復員、母校に復学した。私は国家に必要とされた者だったかどうか、齢80才近くになり、今も生きております。』

この投稿は今から10年以上前になされたものですので、この方が今もご健在なのか否かは不明なのですが、お読みになられていかがでしたか？ こんな時代が、わずか70年ほど前の日本には現実にあったのです。忘れてはいけないこと、次の世代に、きちんと伝えていかなければいけないことが、ここにはたしかにあります。

私は母校での4年間に、たいして勉強したわけではありませんが、この文章を読んで、このような文章を書いた先輩と、このようなことをおっしゃった先生のおられた、あの学校で学べて幸せだった、とあらためて思っています。そしてまた、人間の尊厳を否定し、自由な思考を圧殺した、あんな時代は二度と作ってはいけないとも。

太田さん、お互いにハラをくくりましょう。高橋和巳氏は、あの時代で見事なハラのかくり方をされたと思いますが、私などはまったく比較にならないレベルですが、社会がどう動こうと、私の信念は信念とハラをくくっているつもりです。

私の先達の一人、理論社の故・小宮山量平さんが言っておられました。「絶望から希望へ、その知恵はあるにはあるんです。100年後には世の中、少しは進む。そんなふてぶてしさを持つのです。ハラさえ据われれば、眼前で起きているすべては喜劇ですから。」

あれだけの出版文筆活動をされた人物の最晩年の言葉です。私のような小心者には大きな励みになります。ご参考までに。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■この「弁士注意」の時代に 投稿者：太田代志朗 投稿日：2015年3月28日(土)14時07分27秒 返信・引用

春の花の咲き始めとともに、この掲示板も斎藤恵さんの登場で多くの示唆をうけることができ、まことにありがたくおもいます。

実在の教団の歴史や組織論を研鑽された者ならではご高見に敬意を表します。

人間存在の不可避とともに、それが「超国家主義」というものの実体でしょうが、政治権力の“正義”という“幻想装置”におもわずたじろいでいます。

「弁士注意」の抛ってたつ特高のありようについては、それなりに学んでいるつもりですが、こうしていわれてみると、改めてアジア国家主義による情報操作におどろかされるしだいです。

弁士注意！ 確かに現在のマスコミ報道に、集団に、会議に、運動に、文化人発言に、重い霧のような幕がおおいつくされているようです。

いや、革新リベラルも、自称文化知識人も骨抜きにされてしまっているようであります。

まさに現今の政治的意図によって一連の“暗黒の人民裁判”が行われてきていることも明らかでしょうし、そこにひたひたと押し寄せる秘密保護法、治安維持法——気味わるい足音がひびいてきます。

それにしても「日本的ラディカリズム」とはいったい何であったか。

満州建国のうちにアジア的ユートピアを夢みた「散華」の中津清人のアジ的共栄とは何であったか。

1960年代における反スタ自立論において、高橋和巳はその「破滅による自己確認」と「戦後的知性」でもって、国家権力に吸収されない原初の部分、それこそ文学の問題として果敢に挑戦していったのだとおもわれます。

日本の情念のうちに、「世なおし」の思想を組織の膨張過程で勢力と妥協することがなければどうなるか、今、改めて「邪宗門」を紐解きたくなるおもいです。

そして、斎藤さんがおっしゃられる「高橋和巳を読み方」の一つとして、ここに肝に銘じておきます。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■弁士注意！ 投稿者：斎藤 恵 投稿日：2015年3月25日(水)22時13分31秒 返信・引用

太田さん、校正モレのことなど、どうぞお気になさらないでください。かくいう私も、しょっちゅう、お詫びしております。

ところで、大本教(本来的には、教をつけないで、大本と言うらしいのですが、一般的には大本教で通っていますので、それに従います。)のことが、「邪宗門」にからんで出て来ましたので、もうちょっとおしゃべりすることをお許しください。

まず以下に少し「邪宗門」からの引用をさせていただきます。

「さが拙く、不具に生まれた我が子に注ぐ母の愛は全世界を睥睨する君主の仁政よりもなお神の心に近い。なぜかなら、つぐないえない苦しみ、とりかえせない時間、やりなおしのきかない命の悲しみをその人は知っているからだ。お解りか？ このことが解らずしては、あなたは宗教家の名に値しない。

私とても国家に正義のあることを望む点においては人後に落ちるものではない。しかし、いかにカイゼルの支配が正義のものになろうとも、償い得ぬ個々の痛みを権力が理解することは決してない。

政治はその本質において治める者と治められる者からなり、しかも治められる者が辛苦して働き、治める者が治められる者に養われながら、しかも権力を行使するものである。かかるものには一片の正義も与えてはならぬ・・・

「弁士注意！」と声が飛んだ。同時に通路わきに演壇に向って立っていた警官の列が、さっと体の向きを変えて、聴衆の方にひらきなおった。

.....

国家はその版図内の民に対し、その国民たるを欲すると欲せざるとに拘わらず、義務を課し、租庸調を徴収し、生殺与奪の権を握る。・・・その運命は人為的、強制的運命であり、われらの宗教の自覚的回心による入信と誓約より、明らかにその次元は下位である。

「弁士注意！」ふたたび警告の音が飛んだ。もう一度注意が繰り返されれば、それは自動的に演説中止に切りかわる。」

以上は、「邪宗門」の中に出てくる1シーンです。邪宗として弾圧を受けた「ひのもと救霊会」教主、行徳仁二郎が、「皇国救世軍」軍父、小窪徳忠と公開討論会を行った際のやりとりの一部です。

もちろんこれは高橋和巳氏の創作であり、モデルとなった大本教の聖師、出口王仁三郎氏がこう言ったわけではありません。

ところで私が卒論で扱ったテーマのひとつは、この中に出てくる「弁士注意！」です。これは誰がどんな権限で言ったものなのでしょうか？

1945年までの日本には、内務省という官僚組織があり、そこが警察の総元締めとして、あらゆる治安関係の取締まりを実行していました。そしてその中の「警保局保安課」というのがその中枢でした。

「特高」などと言っても、きっともうご存じではないの方が多いでしょうね。「特別高等警察」の略ですが、「特別」に「高等」だって言うのですから、よほど大きな権力と予算を持っていたのだと思います。

この「特高」が内務省警保局の直轄部隊として、全国各地で「弁士注意！」もやれば、大政翼賛に楯をついたり、国を挙げての戦争への道に邪魔になったり、非協力的な人や組織を徹底した暴力でたたきつぶしたのです。最初は革命的な思想に対して、そして次第にまったくリベラルな考え方まで。

大本教は1921年(大正10年)と1935年(昭和10年)の2回にわたって弾圧を受け、ほぼ壊滅しました。教団取りつぶしの起訴罪名は「治安維持法違反」「不敬罪違反」「出版法違反」「新聞紙法違反」でした。

大日本帝国憲法下においては、数多くの宗教団体が弾圧を受けましたが、あの希代の悪法「治安維持法違反」でたたきつぶされたのは、それほど多くはありません。以下は私の卒論からの引用ですが、それは次の6団体のみです。

大本教(S10 京都)  
天理本道(S13 大阪)  
天理神之口明場所(S13 名古屋)  
三理三復元(S13 香川)  
天理三輪講(S14 大阪)  
日本燈台社(S14 東京、キリスト教系)

ちなみにこの6件の検挙者数は、総計1480人にのぼりますが、その内、大本教関係が987人と圧倒的に多く(ほぼ三分の二)、この悪法を適用された、はじめての宗教団体であると同時に、大本教弾圧の規模の大きさがわかります。

ひとつの見せしめ的な意味合いもあったこの大本教の弾圧の詳細な事情と経過は、拙いながらも私が何十年前前に書いた卒論で何百枚かの原稿用紙をもってしても言い足りなかったくらいでしたから、どうていここで簡単に述べることは不可能ですが、極めて単純化して言えば次のようなことです。

つまり「現人神(あらひとがみ)」を中心として、国民を戦争に総動員していった天皇制ファシズム体制にとっては、神は一人しか要らなかったのです。国を束ね、国民精神を締めつける神がいくつもあっ

ては困るし、そもそもこの種の宗教団体は「現人神思想」と同根なだけに、天皇制ファシズムを民間で支えることもできれば、「現人神」の絶対性を否定するという、両刃の剣になり得る危険性を持っていたのです。

でも私が卒論で強調したかったことは、その件でもありません。

「不敬罪」の最高刑は懲役5年でしたが、「治安維持法」では、それが死刑でした。教団の最高責任者であった聖師、出口王仁三郎は検挙から5年後のS15年に京都地裁での第一審判決で無期懲役を宣告され、以下多くの幹部が10年以上の懲役刑を言い渡されました。

ところが、です。その2年後(S17年)に大阪控訴院で言い渡された控訴審では、王仁三郎のみ懲役5年、他は無罪となりました。つまり、控訴審の時点では、国民を戦争に総動員する側にとっては、大本教など、もうどうでもよくなっていたのです。この記事で私が言いたい点は実はここにあります。

つまり取り締まる側にとって、時代背景が違ったので、叩きつぶす方法も必要性も変わってしまったのです。1935年(S10年)の検挙時点では、日本社会はまだ戦争への総動員の過程にありました。ですから動員する側も、まだ盤石の体制を確立したとは言い難く、数多くの邪魔者が存在していたのです。

ところが控訴審判決の1942年(S17年)には、すでに戦争に突入しており、邪魔者はほぼ処分し終えていました。残ったわずかの怪しげな人間は、徴兵して締め上げ、さらに確実に死ぬ戦線へ優先的に回せば、コトは済んだのです。こうして総動員体制は出来上がり、あとは「欲しがりません、勝つまでは！」で国民精神を締めつけていけたのです。

実際、987名におよぶ大本教側の逮捕者に対して、起訴された者はわずか61名にすぎず、検挙や教団施設のダイナマイトによる徹底した破壊は、明らかに司法的な道筋をたどって行われたのではなく、意識的に教団をつぶすことを目的として、手取り早い方法で行われたことは明らかです。

当時、内務省警保局保安課の大本専任事務官だった永野若松はこう言い放っています。(私はたいの場合、他人の名前を敬称ナシで書くことはしないのですが、こういう人物の場合は、どうしても敬称を付ける気になりませんので、ご容赦ください。)

「裁判は治安維持法で検事局がやるのですが、結社禁止とか建物の破却は別です。たとえそれが無罪であろうと、内務省がこれは許されぬと思ったら独自にやれるのです。内務省は内務省の考えで行政処分で行われる。司法の判断を、待つ必要はない……」

これが「特高」の元締めの考え方でした。チェックされることのない権力を持った組織が不可避免的に陥る傲慢さです。無制限な拡大解釈という……。

千名近い関係者を逮捕しながら、そのほとんどは送検もせずに、暴力で脅して屈服させ、建物を壊し、淫祠邪教のイメージを社会に振り撒き、裁判など待たずして教団を消滅させてしまったのです。

そう言えば最高刑が死刑であった「治安維持法」を適用されて、死刑判決を受けた者は日本の歴史上ひとりもいませんでしたね。そんな手間をかける必要がなかったのです。逮捕後の留置中の暴力で、いったいどのくらい大勢の良心を持った人達が直接・間接に殺されたことでしょうか。また、徴兵されて極限の暴力の中、有無を言う間もなく、無念の中に死んでいかざるを得なかった人達がどのくらいいたことでしょうか。

この記事は何よりも＜自由＞を尊ぶ私が、歴史を少し誇張して書いているわけでは決してありません。たった80年ほど前にこの国で現実起こったことを史実にもとづいて、できるだけ冷静に書いているだけなのです。現政権を筆頭に、多くの歴史歪曲的、国粹主義的、暴力的主張がまかり通り始めている現状を見て、つい一言申し上げたくなりました。実は今から半世紀近く前に書かれた高橋和巳氏の作品からも、私と同様な危機感を強く感じるのです。

もし不運にも私が1930年代の日本に生まれ合わせていたら、まず間違いなく生きてはおられなかったと、私はある自負を持って確信していますが、言うまでもなく高橋氏もそうであったと思います。

今の時代に高橋和巳氏を読むのには、こういう読み方もあってよいのではと、ひそかに思っておりますので、あえて書かせていただきました。もしも掲示板の趣旨から逸脱しておりましたら、どうかお許しください。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■誤植、お詫び。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2015年3月24日(火)06時55分3秒  
返信・引用

この掲示板で3月22日発信の私の文章に誤植あり、以下に訂正いたします。

文章半ばの「破壊工作ががかさって」→「破壊工作がかさなって」  
1番下の「超国主義」→「超国家主義」

斎藤恵さん、慎んでお詫びします。  
もともと校正力がなく、いつも身の不覚を恥じております。

■感謝しております。 投稿者：斎藤 恵 投稿日：2015年3月23日(月)12時08分48秒  
返信・引用 編集済

太田さん、齋藤 恵 です。

「邪宗門を真正面から持ち出して」しまい、太田さんには、おつらい思いをさせてしまったかなと、いささか申し訳なく存じております。

でも高橋和巳氏の没後40年以上経った現在でも、こうした掲示板を主宰しておられる太田さんは、本当に誠実な方だとお見受けしています。氏のお連れ合いでおられた、高橋たか子さんが後年こんなふうを書いておられましたが、まったくその通りだと思います。

「一言、その人の名誉のために言うておくが、太田代志朗君だけは、利心なく、ひたすら和巳を尊敬する、純朴な文学青年だった」(高橋たか子著「高橋和巳という人―二十五年の後に」河出書房新社)

また、

> 吉本隆明が「大衆向きのインテリ小説だ」なんていってから文壇的におかしくなり、また文芸評論家もまともに向き合わなかった不幸な状況があります。

とのことで、これは高橋氏の身近におられた太田さんだからご存じのことと思いますが、私に関して言えば、吉本隆明氏が「邪宗門」をどう評価しようと、どうでもよいことに思えます。ちなみに、吉本氏の作品は私も何点か読んだことがあります。まったく心に響いてくることはありませんでした。その意味では、高橋和巳氏の存在は私にとっては今でも大きいのです。吉本氏の比ではありません。今回のご縁で、このような場を知ることができたことを、あらためて感謝しております。

1960～70年代に「戦後民主主義の虚妄」が様々な立場の人々から言い出されましたね。「戦後の進歩的知識人」への痛烈な批判も起きました。でも、天皇絶対主義国家への反省をもとに行動してきた「戦後の進歩的知識人」の中心的な存在の一人であった、故、丸山眞男氏が、当時その風潮に対して、「戦前の『現実』と、戦後民主主義の『虚妄』との間でどちらを選ぶかと言われれば、私は後者に賭ける。」と言い切っておられました。実は私の立ち位置は、当時も今もまったく不動でして、丸山眞男氏のこの視点に深く共感する立場なのです。

ささやかな立場で、しかも極めて弱い立場ではありますが、私は生ある限り、この気持を受け継いでいこうと思っています。

ご縁あって、こうした対話の場をいただいたことに感謝し、これからも皆様の投稿を読ませていただき、たまには私も書かせていただきます。よろしくお願ひいたします。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■「邪宗門」のかなたへ 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年3月22日(日)21時03分54秒  
返信・引用

「邪宗門」のことをお書きくださり、改めて深く瞑目しております。  
封殺された高橋和巳の幻野がゆらぎます。

その後の身すぎ世すぎを経てきて、今ここに「邪宗門」を真正面から持ち出されると、私もまた引き裂かれてゆくようなおもいにかられます。

雪を食うたとて腹さふくれぬ・・・  
濃霧(ガス)ば吸うたとて浄土にゃ行けぬ・・・  
泣ぐな泣ぐな・・・

「捨子物語」の主人公の後年を飢餓の村から生き延びてきた千葉潔に託し、まさに「邪宗門」は国家・思想・宗教が本来的にかかえたルサンチマンを明らかにしようとしたもののおもわれる(これは拙論「高橋和巳序説」でも、まだ追究できえないでいるテーマの一つです)。

一つ一つの情景、ひのもと救霊会——大本教の弾圧、暴動、破壊工作がががさっていきます。  
そこには高橋和巳の戦後的ジレンマがあり、当時の大衆文化や進歩的文化人という輩への反批判があったともおもわれます。

あれは吉本隆明が「大衆向きのインテリ小説だ」なんていってから文壇的におかしくなり、また文芸評論家もまともに向き合わなかった不幸な状況があります。  
戦後的ラディカリズムに葛藤していた高橋和巳は、常にイデオロギーの虚妄性を衝いていたのですが。

「朝日ジャーナル」から何枚書いてもいいといわれ、好調に2000枚をなしたとはいえ、なぜかその直後から高橋和巳は不機嫌になっていったのですね。

最も絶望的な詩、そは最も美しき詩  
最も苦惱せる死、そは最も美しき死

それにしても、斎藤さんが亀岡の本部に「卒論の資料集めに」寄宿。  
そこでじかに次期教組や資料室の幹部に会ったご体験をもつことに驚き、またそれは凄い体験であったとおもいます。

高橋和巳も2、3度訪れていた亀岡の聖地。  
機会あらば是非、その「立て直しから超国主義へ」は拝読したいものです。

■初めて参加させていただきます。 投稿者:齋藤 恵 投稿日:2015年3月20日(金)23時02分38秒 返信・引用 編集済

先般、ちょっとした偶然から、この掲示板を主宰しておられる、太田代志朗さんと少しばかりご縁を持たせていただくことができました。当掲示板、2月23日に太田さんが書き込んでご紹介くださった、齋藤恵(さとし)と申します。初めて参加させていただきます。1948年生まれ、今年67歳です。

ここに来られる多くの皆様と同様に、私もこれまでの人生の中で、高橋和巳氏に大きな影響を受けたひとりです。今でも、その世界を時折振り返り、現在の我が身のありさまを恥じる時間を持つことがあります。

貧者とは何ぞや、支配される者なり

支配とは何ぞや、悪行なり

悪行とは何ぞや、欲望なり

欲望とは何ぞや、無明なり

無明とは何ぞや、執着なり

ああ、如何にして執着をのがれんや、ただ信仰によってのみ

信仰とは何ぞや、救済なり

救済とは何ぞや、死なり

死とは何ぞや、安楽なり

これは、私が最も強い影響を受けた「邪宗門」の中に出てくる宗教教団「ひのもと救霊会」の奥義書の一節です。きっと皆様もご記憶にあることと思います。

この小説の発想の端緒は、すべての宗教がその登場の始めには色濃く持っている<世なおし>の思想を、教団の膨張に伴う様々の妥協を排して極限化すればどうなるかを、近代日本の精神史を踏まえつつ、思考実験したいという高橋氏の強い思いでした。

「ここに書いたものは、あくまでさもありなむ、さもあらざりしならむ、虚実皮膜の間の思念である……。ただ、いかなる想像力もまったくの真空には羽ばたけず、いかなる夢幻の花も樹根は現実に根ざさねば枯死するゆえに、現存の宗教団体の2,3を遍歴し、その教団史を検討し、そこから若干のヒントを得た。とりわけ、背景として選んだ地理的環境と、2度にわたる弾圧という外枠は、多くの人々にとって、ああ、あれかと思われるであろう類似の場所および教団が実在する。」

1995年の今日、3月20日、猛毒のガスを無差別に撒いて、大勢の人々を殺傷した凶悪・愚劣な宗教を名乗る団体が現実であり、その問題がまだ解決したとは言いがたい状態なだけに「邪宗」などという言葉は、たいへん使いにくくなってしまいましたが、実は私がこれまでの半生で、もっとも惹きつけ

られ、夢中になって読んだ書物のひとつはこの「邪宗門」という小説でした。多分、あの長編を数回は読んでいます。

そしてさらに告白しますと、私はこの小説がモデルとして取り上げた、明治期に誕生したある新興宗教の歴史を大学の卒業論文のテーマとしたのです。

それは京都府亀岡市に本部をおく「大本教」で、私の卒論のテーマは「大本教の史的考察 - 立て替え立て直しから超国家主義へ-」というたいそうなものでした。

「三千世界一度に開く梅の花、うしとらの金神(こんじん)の世になりたぞよ。梅で開いて松でおさめる神国の世になりたぞよ。・・・いまは獣の世、強い者勝ちの、悪魔ばかりの世であるぞよ。・・・これでは世はたちてゆかんから、神が表にあらわれて三千世界の立て直しをいたすぞよ。用意をなされよ。皆の衆、世が変わるぞよ。改心をいたされよ・・・」

明治25年(1892年)57歳の時、京都府北部、綾部の貧しい大工の妻であった出口ナオが神がかり状態になり、以後83歳で亡くなるまでの二十数年間に、半紙二十万枚にも及ぶ膨大な「お筆先」を書き続けたことから、この教団の歴史は始まりました。

私は学生時代に卒論作成の資料集めのために、しばらくの間、亀岡の教団本部にお願いして寄宿しながら、資料室に閉じこもっていたことがありましたが、当時は3代目教祖、出口直日(なおび)さんの時代でした。その後、第4代目教祖になられた聖子(きよこ)さんは当時まだ30歳台の若手幹部でした。資料漁りに東京から来ている、風変わりな学生のことを聞きつけて来られたこの方とも、一度資料室でお会いしたことがありましたが、その聖子さんも、今から十数年前の2001年に亡くなられたと聞きました。

今回、太田さんとの出会いがきっかけで、久しぶりに、あの卒論を手にとって見ました。実は私は当時としては異例だったのですが、卒論をコピーして一部手元に持っているのです。今にして見れば、まったく他愛のない内容ですが、今から46年前、22歳で全力投球で書き上げたその迫力の気持だけはたしかに感じます。

そんなわけで、「邪宗門」と「大本教」はまったく異なる存在ですし、ましてやオウムなどという醜悪なグループとはまったく質の違うものですが、明治、大正、昭和にかけてこの教団が経験せざるを得なかった2度の弾圧についても、かなり調べた記憶があります。

宗教心など極めて希薄な私ですから、当時から教団の教義そのものに興味があったわけではなく、あくまでも近代日本の社会史の中で果たした役割に関心があっただけなのですが、そんな私に「こんなテーマを研究されるようでは、おそらく就職もおぼつかないことでしょうから、よかったら当教団の資料研究員にでもなりますか？ 雇ってあげますよ。」と親切に誘ってくれた資料室長の筧(かけい)さん

という方がおられたことを思い出しました。今でもお元気かどうか、今の私には知るよしもありませんが、そんな善人ばかりの団体でした、あそこは。

時間を見つけながら、また続けさせていただきます。太田さん、皆さん、よろしくお付き合いいただけたら、うれしく存じます。皆さんのご投稿も楽しませていただいております。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi>

■梨木マンション② 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年3月4日(水)22時02分53秒  
返信・引用

1960年代、梨木神社に隣接した北側に立命館大学の教官棟があった。  
広小路学舎に教授室があったが、一部この教官棟に講師、助教授が研究室として設けられていた。

高橋和巳は1956年、同大中国文学部語学を担当し講師として赴任。  
「悲の器」文藝種賞受賞の作家を私が訪ねたのは1963年。  
広小路学舎から歩いて3分、高橋さんは広い研究室でにこやかに迎えてくれた。  
高橋和巳の二階の研究室からは東山が眺望できた。

当時、御所の中に運動場があり、衣笠グラウンドで行う体育講習の時間に満たない者はここでソフトボールやテニスに興じ補欠時間を補った。  
私もよくこの御所の運動場でソフトボールをやった。  
そして、梨木神社をぶらつき、染井の名水も飲んだ。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 梨木神社のマンション① 投稿者:薄氷堂 投稿日:2015年3月4日(水)19時37分32秒  
返信・引用

> No.86[元記事へ]

> 太田代志朗さん

梨木神社のマンションは初耳でしたが、今日テレビで下鴨神社境内にも億ションが建つというニュースを知りました。なんでも式年遷宮の費用を捻出するためとのこと。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■梨木神社のマンション① 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年3月4日(水)17時20分56秒 返信・引用

物議をかもした御所に隣接の全31邸「イーグルコート京都御所梨木の杜」(全31邸)の工事は着々とすすんでいる。

1億円越えのいわゆる億ション。参道に緑美しく生い茂る樹木御所周り、寺町通りの景観も大きく変わる。神社境内、参道の上に建てられ、鳥居内にどっかりと鎮座する。

梨木神社の由来を調べると、明治維新、王制復古の立役者である三条実萬、実美父子。彼らを祭神に明治18年に創建された。

久邇宮朝彦親王の令旨により三条家の邸宅後に社殿を造営したもので、萩の名所、京都三大名水で今も唯一存在する「染井」の名水で名高い。

神社側としては、氏子の減少と社殿等の老朽化に対する維持も大変厳しいとの事から、敷地一部を60年に渡り貸す(借地権付マンション)。

最低売り出し金額でも1戸あたり6000万円以上という。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■カフェ・ド・エルサイトウにおける高橋和巳 投稿者:太田代志朗 投稿日:2015年2月23日(月)15時59分39秒 返信・引用

ネットで好評の「カフェ・ド・エルサイトウ」の斎藤恵氏から、当方の「高橋和巳研究」のことで挨拶メールあり。

精力的な事業を展開している斎藤さんは学生時代に高橋和巳を読んで感動、大きな影響をうけてきたといふ。

その多彩なコンテンツの中に当方の写真や年譜などが引用紹介されている。

<http://www.el-saito.co.jp/cafe/cafe.cgi?mode=res&one=2&no=3376>

斎藤恵氏の高橋和巳体験がどれほど深く衝撃的であったかがよくわかる。

その誠意あるメールもありがたくおもっている。

当方は”封殺された高橋和巳”がネットで浮かびあがることが一つの供養であり、また文学の真実の問題だともおもっているのにかはりはない。

あの憂愁と褐色の時代は永遠に総括されることはないのだらうけれど。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■『冬の旅』の悲哀と転落 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年11月21日(金)03時46分49

秒 返信・引用

ノーベル文学賞候補にあげられ今や国際的作家として話題呼ぶ村上春樹について一向に関心がなく、またその世界を理解できぬ浅墓な次第である。

こうした中で近来の大きな日本文学の収穫は、一つに辻井登の『冬の旅』(集英社)であらう、と思っている。

デジタル時代に相応した透明な文体が、その破滅の行程を浮彫にする。

強盗致死事件で滋賀刑務所を出所した 36 歳の男のドミノ倒しに墜落していく人生が一直線にえがかれている。

秋葉原通り魔事件、淡路阪神大震災などリアルな時代感を背景に、自己の葛藤や不条理を自問することより、なすがままの直裁な日常に動物的に埋没する。

そして、ついには大阪・釜ヶ崎のドヤ街に流れつく。

物語は西方の補陀落への冬の旅でもなからうが猥雑に下降し、常に俯き加減の主人公の生い立ちやその後の転落が重層的な文学手法で編み出されている。

もっとも、私はそこに『憂鬱なる党派』の西村や家屋敷や藤堂の宿命のとぐろを巻くやうな転落と悲哀の片鱗をみているのであるけれど。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta>.

■郷愁のロープシン、憂愁の声。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年11月3日(月)15時04分29秒 返信・引用

ロープシンの『蒼ざめた馬』の読書会を開いたのは京都時代の高橋和巳だった。同人誌「対話」の定例の会でのことだった。

その工藤正廣訳の『蒼ざめた馬 漆黒の馬』(未知谷:2006年12月発行)が手元にある。

ほとんど40年ぶりの刊行である。

当初(晶文社版)、『蒼ざめた馬』解説は平野謙であり、この『漆黒の馬』の解説は高橋和巳が担当している。

改めて高橋和巳の解説を読み返し、訳者は「名状しがたい感慨」を持ったと”あとがきで”いふ。

鎌倉の家に辛夷の花を持っていったこと。

病状の高橋和巳は身を越し「白哲の貌」で一期一会の対応をしてくれ、「その声の憂愁は忘れがたいものだった」とも工藤正廣氏は書いている。

それが「1972年3月のこと」としているのは高橋和巳没が1971年5月3日で何かの間違いだらうが、一つの時代がまさに”郷愁のロープシン”とともによみがへってくる。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■ありがとうございます 投稿者:Kaoru 投稿日:2014年9月3日(水)15時50分46秒  
返信・引用 編集済  
太田代志朗さま

ご丁寧なお返事を誠に有難うございました。  
こちらこそ、御礼が遅くなってしまい本当に失礼致しました。

「高橋たか子挽歌 60 首」を拝読しました。私ごときが言うのも僭越ですが、  
一つ一つの美しい御歌に深いお心が籠っているようで、これはやはり生前の  
高橋さんと長きにわたってご交流を持たれた太田さまだからこそと感じました。  
そしてそこに描かれた若き日の高橋さんの姿に鮮烈な印象を受けました。

『終りの日々』を読み、最晩年の高橋さんが孤独を深められていったご様子が  
とても痛ましく感じられました。  
文学に関する考え方は人によってまた時代によってさまざまですが、  
高橋さんが晩年に手がけられたお仕事が刊行されなかったことは残念です。  
21 世紀の日本の文学状況については否定的に捉えていらしたことでしょう。

9 月にはいりやや涼しい日が続いております。  
気候が不安定ですので、どうぞご自愛くださいませ。

■kaoru 様へーふたたび。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年8月23日(土)21時49分  
23秒 返信・引用

「高橋たか子」について関心を持ち、語れる方がいて、嬉しく思います。  
その文学作品のどれだけを読解し理解しているかといえば、私は不勉強ですが、  
今なお、悲しみとともに、塞がれる日々であります。

サイト「花月流伝」→WORKS→短歌→「装いせよ、わが魂よー高橋たか子挽歌 60 首」  
があります。

もし、よろしければ、お読みくださいませか。  
この一首一首につき、私は 20～50 枚の解説、小説を書く分量と等質の重みを込めています。

夏が過ぎてゆきます。  
そう、また私も「情動言語」とかけ離れ、落ち流れているのでしょうか。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■kaoru 様へ 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年8月23日(土)19時15分57秒  
返信・引用

8月始めにご投稿いただきながら、大変失礼しました。  
もっと早く気がつけばよかったものを、他意はありません。  
ご容赦ください。

追悼書評、お読みいただき恐縮です。  
フランスのことは何も分かりませんが、爾来、また書庫の関連書を紐どいています。

どうぞ、いいお仕事を続けられますよう。  
厳しい残暑、取り急ぎお詫びまでにて、ご自愛ください。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■大変失礼いたしました 投稿者:Kaoru 投稿日:2014年8月3日(日)22時00分32秒  
返信・引用  
太田代志朗さま

たびたび失礼致します。  
貴ホームページ『花月流伝』で『終りの日々』の書評を見ることができることを  
発見致しました。お騒がせしまして大変失礼しました。

私はクリスチャンではありませんが、翻訳などを手がけている関係から  
たか子さんの書籍などに接し、優れたフランス語の力など、  
やはり日本には稀有な作家だったように感じております。

今後も『花月流伝』を拝見させていただきたく存じます。  
繰り返しになりますが、酷暑の折、ご自愛くださいませ。

■終りの日々について 投稿者:Kaoru 投稿日:2014年8月3日(日)18時39分39秒  
返信・引用  
太田代志朗さま

初めて書き込みさせていただきます。  
ときどきこちらのホームページを拝見させていただいている者です。

高橋たか子さんの『終りの日々』の追悼書評をお書きになられたということですが、  
その御書評は出版物・あるいはネットで拝見することができますでしょうか？

お忙しいなか恐縮ですが、ご教示いただければ幸いです。

酷暑の折、どうぞご自愛くださいませ。

■終りの日々——追悼書評 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年6月9日(月)20時24分40秒 返信・引用

高橋たか子著『終りの日々』(みすず書房)の追悼書評について、梅原猛先生からは「よう書いてくれたね。悲しくなるね」といふ有難いお言葉だった。

橋本安央氏からは「”魂の行方”にたいする問いかけは常に根源的なのでしょう」と。またランボーを訳している小松剛君から図書新聞をみたといって早速ハガキをくれたのは嬉しかった。俳人の高橋博夫氏からはフランス同化の文学的宿命論の手紙いただく。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/index.html>

■わが日録——2014nenn 3月13日 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年3月15日(土)10時57分37秒 返信・引用

03月13日(木) 春雨に花の森が静まり返る。

朝の春雨の小止みにアンと散歩。花の森が芽を吹きだし静まり返っている。

かうして「憂き世にはとどめおかし」と武州・小城下に埋もれていくのだらう。

夢幻庵・床の間に山中智恵子さんに書いていただいた色紙。

「くれなゐの雨降るころ春の雨老いにけらしも老いざらめやも」。

わが追悼文藝論——「終りの日々」書評にとりかからねばならぬ2日、3日。

高橋たか子(1932~2013)の”内なるフランス”の苦悩と思索。

リビングの椅子で「何もすることがない」日がなぼんやりしている。

フランス語による聖書朗読。祈りと執筆。

リアルな生活は完全に欠落し、死が実感としてせまる。

「亡夫と私の二人だけの記憶は、天国にて保存されるもの」ともしている。

茅ヶ崎のホームで思ひと言葉に共振できる人がいなかったその晩年の孤独に胸がふさがる。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■鎌倉の幻の家 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年2月15日(土)21時57分19秒 返信・引用

高橋和巳は1967年、鎌倉に移住した。

鎌倉・二階堂の首塚の隣接、裏山から落ち葉が舞い落ちる平屋である。  
京都大学教授赴任で家を空け、時々帰った。  
それが全共闘運動の渦中にダウン、鎌倉の帰り病床につく。

高橋和巳逝去は 1971 年 5 月 3 日。  
爾来、その鎌倉の家は静かな亡者の家になった。  
新鋭作家を訪れた大勢の人の声を守る“番人”はいなかった。

1989 年、新居に移り住んでいた高橋たか子は当家を 7200 万円で売却した。  
バブルに沸く時代だった。  
信仰の深い道に入っていた高橋たか子はその売却金を北海道の教会に寄付。

すべてが過ぎていった。  
落ち葉舞う“幻の家”はあとかたもない。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■終りの日々に 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014 年 2 月 10 日(月)11 時 20 分 34 秒  
返信・引用

高橋たか子さんは『終りの日々』(みすず書房)で、  
「ずっとずっと昔のどうしても書き残しておかねばならぬこと」としてつづる。

「亡夫・高橋和巳が 1969 年、  
大学紛争の最中に京都からちょっと鎌倉に戻ってきて、私にだけ言ったこと。  
河出書房の「文藝」の要求が嫌だ。

自分の思いどおりに書かせようと迫ってくる。金田君はよかった。  
もういちど金田君になってもらおう、何とかしてもらいたい。  
——二十世紀が終る頃になって、私はありありと思い出したのだ……」。

それは必至の言葉だったという。  
私も大学バリケード封鎖中の京大中国文学の高橋和巳研究室を訪れていた時、  
その編集者が強い言葉で原稿催促する現場にたちあつたことがある。  
それは若造の編集者にしては、口調も居丈高でひどいものだった。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 高橋たか子の終りの日々 投稿者:薄氷堂 投稿日:2014 年 2 月 4 日(火)23 時 15 分 0

秒 返信・引用

> No.70[元記事へ]

> 太田代志朗さん

> この私がない。ここにいるというのにいない・・・

その感覚はよくわかります。理屈ではなしに、実感として。

では、自分はいったいどこにいるのか。いや、そもそも自分などというものが「いた」のだろうか？

> 何もすることがない・・・

これもまた…そもそもすること、すべきことなどあったのだろうか？

それでもなお生きている。何もしなくては生きてゆけないから、むりやりその何かをこしらえながら。

むりやり何かをしても到底満たされないし、まさか麻薬を打つわけにもいかな  
いから酒を飲む。そうかといって、絶望さえし切れない…世紀末にはずいぶん間  
がありますけど、まあ、そんなところでしょうか。

<http://hakuhyodo.txt-nifty.com/smokingroom/>

■高橋たか子の終りの日々 投稿者:太田代志朗 投稿日:2014年2月4日(火)19時56分2

秒 返信・引用

机のかたわらに積んであった1冊をとりよせる。

やっと読む気になった。

高橋たか子著『終りの日々』(みすず書房 2013年12月25日発行)。

明るい海辺の部屋でつづられた2006年～2010年の手記(手記だが発表前提に原稿用紙に書かれた)。

表現するものにしかわからぬ言葉

あなたの孤独、パリ、執筆、修道院、ペルソナ。

「考えている。考えている。これからどう生きるか？」

ここにいない、と感じる。誰が？ この私がいらない。ここにいるというのにいない……。

白い光の、ぱっぱと炸裂する、真夏の、昼間を、ただ一人で茫洋と歩いている私自身……。あの、ボルドー南部の、?せ地に、はてしなくつづく松林こそ、若い頃からの、私の夢のようなもの……。

人生の最後の日々——という意識が、常に私にはある。その日々に、何をするか？

何も、する気がない、という気分があるのだ。むなしいわけではない……。

何もすることがない……」

(高橋たか子著『終りの日々』より)

■「高橋たか子挽歌」について 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年10月20日(日)10時17分41秒 返信・引用

このほど「高橋たか子挽歌」60首をサイトに掲出した。

鎌倉の新居をお訊ねした最後はいつのことだったろう。

パリ滞在からイスラエル巡歴などを経て深い霊的世界に入り、意欲的な創作活動をつづける高橋たか子さん(1932~2013)とはしだいに距離が遠くなっていった。

この30年あまりまったく会っていない。

いつだったか、それでも私のことについて書かれた一文に接したが「何をいまさらに……」と思っていた。

それがこの夏7月に亡くなり、日のたつごとになぜかいいしれぬ悲しさがこみあげてきた。

葬儀・告別式に出していないが、その思ひが忽然と歌になった。

回想と滄沱の100首がなされ80首に絞り、鎮魂の60首になった。

一首一首には極私的ドラマがあるがいっさい触れていない。

■Re: 残暑——ひとこと 投稿者:薄氷堂 投稿日:2013年8月17日(土)18時46分26秒 返信・引用

> No.64[元記事へ]

太田代志朗さん

ごていねいに恐れ入ります。まことに頼りなき管理人で申し訳ございません。

こちらは天国のような涼しさですが、本州方面ではとんでもな

い暑さがつづいているようですので、くれぐれもお体を大切になさってください。

なおご投稿がだぶっておりましたので、管理人判断にて、投稿時間の古いほうを削除させていただきました。どうかご了承ください。

■残暑——ひとこと 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年 8月 17日(土)15時 25分 53秒  
返信・引用

薄氷堂さま——残暑お見舞い申し上げます。

過日はHP、ブログのことなど貴重な示唆を頂戴し、有難く、感謝しております。

ネットのこと、まだ何も分からぬ者ですが、最近の図書館のデータがソフトの深化でもう読み取れないことなど知るにつけ、情報・ネット・PCなどますます複雑な環境下で人間は漂流してゆくようです。

今朝、掲示板に送信しました。

いつもの誤字、お許してください。

「高橋たか子」さんのこと、

個人的にいろいろありますが、控えておきます。

あれから、薄氷堂さんに「お礼のひとこと」と思いながら、そちらのお仕事も順調のご様子にて、欣快の至りです。

残暑・炎暑——取り留めもなき夏の日々。

京の大文字焼きも終わり、相変わらずの武州暮らしです。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■高橋たか子さんを悼む 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年 8月 17日(土)06時 28分 11秒  
返信・引用

高橋たか子さんが7月12日亡くなった。享年81歳。

私は新聞でその逝去を知った。

葬儀は近親者で行われ、喪主は著作権管理者ということだった。

高橋たか子さんとは個人的にもいろいろあった。

だが遠い人になっていた。その高みが高なのか私には分からなかった。

たか子さんは人間の情やセンチメンタリズムを拒否されていた。

「一言、その人の名誉のために言っておくが、太田代志朗君だけは、利心なく、ひたすら和巳を尊敬する、純朴な文学青年だった」(高橋たか子著「高橋和巳という人——二十五年の後に」河出書房新社)

「純朴な文学青年」とは懼れいるが、ご冥福を祈る。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■再び 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年5月22日(水)17時06分56秒 返信・引用

青嵐の5月となった。風香り、木々が緑をうたふ。  
犬の散歩でゆく公園の緑林をぶをぶらぶらし深呼吸してみる。  
巡る季節に自然の息吹が心身をやわらかくほぐしてくれる。

5月・憂鬱なる党派——去年は高橋和巳没後40年でいくつか小論を書き上げた。  
まさに悲哀と解体のパトロジー。富士霊園にゆくことはもうないだらう。  
黄昏に邪宗の門潜りゆけばいい。

タバはよく眠った。マイスリー(睡眠導入剤)も飲まなくなった。  
寝床に入ると新聞や本を読み、それも小一時間ほどで眠りに入る。  
夢をよく見る。夢に追われる。  
なぜか”四億八千の思ひ”がかけめぐる。

■福島泰樹短歌絶叫コンサート 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年5月20日(月)15時14分34秒 返信・引用

寺山修司没後三十年記念:福島泰樹短歌絶叫コンサート  
2013年この5月24日(金)、ライブハウス「バディー」(池袋西武線・江古田駅南口)。  
「一周忌の霊前に歌集『望郷』を献じた私は以後毎年命日の五月に追悼コンサートを開催してまいりました」と。

鶴啼くなり男の愁いと下谷の路地を駆け抜け、雪の深夜を彷徨した日々。  
内なるデモンとともに”清かなる夜叉”は黒時雨の中を疾駆していったのだった。

■京の嵐に——高橋和巳挽歌 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年5月19日(日)19時03分34秒 返信・引用

この寒かった2月に体調を崩し、思わぬ不覚をとった。

春の訪れとともに何とかしのぎ、初夏を迎えた。  
年々、足腰は確実に弱ってきている。  
老いを素直に受け入れることも健康の一つなのだろう。

5月、青嵐に黙々と過ごしている。  
ふと思い立って、やすいゆたかの総合サイト「プロメテウス」に「京の嵐にきみはうたはむ——高橋和巳挽歌」30首を掲載した。

これは「季刊月光」(勉誠出版)3号特集「全共闘」(2011年春発行予定)のために書いていたのだが、同誌が2号でやむなく終わり、筐底深く眠っていたものである。  
半時代的な、こんな思いつめたものはもう二度とうちもあまい。

そして、富士霊園には、もう行くことはない。  
そう思いながら、5月を無骨に過ごしている。  
武州小庵に風が流れ、鬱々茫然の時が刻まれている。

今ひとたびの饗宴を 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年3月2日(土)04時59分49秒  
返信・引用

2013年3月1日、曇り。  
今年も春一番、昼頃から突風が吹き荒れる。  
リビングに活けた乙女椿が花開き、満開の白梅、土佐水木、水仙。  
夕刻、城址公園に犬と城址公園に散歩すると、桜の森が風で轟々と鳴っている。

「私にとって”芸術”は饗宴であり、それは言語という虚構の世界における饗宴である。その饗宴が砂の上でしか可能でないところに、時代の運命がある。」  
(磯田光一『砂上の饗宴』新潮社 1972)

然り、孤独な情念の仮面の中に芸術の証しを結実させやう。  
懐かしくも磯田光一(1931~1987)の凶々しい饗宴、その文学論集を改めて紐解く。  
今どきのブンガク評論にせめぎあふ「おはなし」などにつきあっている。

もはや、時代の”運命”も何もない地平で、へこたれはしかつめらしく最終レースにむきあう。  
「古い」の豊かさに夢みられる虚構の饗宴を秘めて。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■書簡・高橋和巳・辻邦生・埴谷雄高の行方について 投稿者:太田代志朗 投稿日:2013年1月28日(月)18時45分46秒 返信・引用

日本近代文学館・会報に執筆依頼された時、担当の K さんが有難いメールメールをくださった。「高橋和巳書簡、たいへん興味深く拝見いたしました。Web上で広く、文学資料を公開することの意義はとても大きいものだと思えます」。

頃日、辻佐保子著『辻邦生のために』（新潮社）を読んだ。

辻邦生さん（1925～1999）からも書簡を 3 通ほどいただいている。

1 通は「弱気になってはいけません」といふ激励、1 通は『西行花伝』について、そして 1 通は「定家春秋」（未完）をすすめていられる頃の一文。

また埴谷雄高さん（1909～1997）からはハガキを 5 通頂戴している。

辻・埴谷書簡のweb公開は控えているが、これら書簡の行方についてお訊ねすると K さんは「小館といたしましては、いつでも有り難く、寄贈のお話を受け付けております」といふことだった。

さて、これらの書簡をどうすべきか、考えめぐらしている。

■埴谷雄高の「精神のリレー」 投稿者：太田代志朗 投稿日：2012年12月3日(月)15時31分28秒 返信・引用

松本健一（聞き手）『埴谷雄高は最後にこう語った』

（毎日新聞社 1997年刊）より

・ぼくは精神のリレーということ言っていますが、高橋がぼくから受け取った精神は、ものの考え方とことであって（略）戦後文学を超える文章、文学を書いてくれないですよ。

・ぼくは絶えず言った。こういう文章では」だめだと。

・高橋自身は学者になりたい気が強くあった。高橋の学者になりたいという色気が文学を毒したわけです。

・文章はもう少しよい文章を書いてもらいたいと思って、これだけは何べんも言っても直らなかったですね。あれは不思議だった。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■妄想の日々に 投稿者：太田代志朗 投稿日：2012年12月2日(日)18時05分42秒

返信・引用

組織の中で凄んでみることはない。

ただ、のんびんだらりとしていればいい。

かくて高橋和巳は“日向ぼっこしている樽”の中で、その妄想をふくらませます。  
人類の頭蓋が熱気帯びてゆくまで、ニタリとしながら思考を詰める。  
それが自閉症であろうといわれようが、しったことであるまい。

妄想が、新たな世界を展いていったのだ。  
文学は非永久的革命者のアリバイだ。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■高橋和巳書簡 8 通の行方・保存 投稿者:太田代志朗 投稿日:2012 年 11 月 14 日(水)14 時  
54 分 23 秒 返信・引用  
高橋和巳からいただいた書簡(1964 年 8 月 20 日~1975 年 2 月 3 日付)は手元に 8 通ある。

これは WEB サイト「高橋和巳研究」の「書簡」にすでに紹介・公開している。  
「私信は当事者以外には秘すべきで、衆目にさらすものでない。  
しかし、「作家の言動は広く語り継がれなければならぬ」との思いがあるからである。

昨年 2011 年初夏、日本近代文学館より「高橋和巳生誕 80 年、没後 40 年」ということで執筆依頼を受けた。  
同館「館報」(2011 年 7 月 15 号)に「孤高の修羅よ瞑らざれ」として掲載された。

この時、私は日本近代文学館の方に、高橋和巳書簡の今後の保存につき訊ねた。  
「書簡の行方については、小館でも承っておりいつでもご連絡ください」ということだった。

さて、寄る年なみとともに高橋和巳書簡 8 通を棺を蓋いてまで固持してゆくか。  
或いは寄贈・保管を早目におねがいしておくべきか。

——晩秋、穏やかに時が流れる。季節の移ろいに自然も人も変わる。  
紅葉の彩りに沿うように山茶花の花が繚乱と咲いている。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 「憂鬱なる党派」を巡る座談会原稿の行方 投稿者:薄氷堂 投稿日:2012 年 6 月 16 日  
(土)00 時 44 分 13 秒 返信・引用  
> No.52[元記事へ]

> 太田代志朗さん

すっかりごぶさたしております。

こしばらく面倒な本をこつこつ読みつづけているものですから、なかなか高橋和巳の作品には取りかかれませんが、ハーディの『日陰者ジュード』を読み終えたとき、ふと『憂鬱なる党派』の読後感に似たものを感じました。

もちろん両者はまったく毛色の異なる作品なのですが、連想を誘ったからにはそれなりの理由があるのでしょう。いつになるかはわかりませんが、『憂鬱なる党派』を再読したいと思っています。

> 行方の分からぬ貴重な座談原稿は何者かにより故意に隠匿され消滅してしまったのか。無念極まりない。

当時のことですから、ワープロ文書ファイルなど考えられなかったとはいえ、たいへん残念なことですね。

■「憂鬱なる党派」を巡る座談会原稿の行方 投稿者：太田代志朗 投稿日：2012年6月15日 (金)04時32分27秒 返信・引用

高橋和巳(1931～1971)の『憂鬱なる党派』(河出書房新社)は1965年11月に発行され話題を呼んだ。

翌々年「対話」同人の小松左京、三浦浩、北川荘平、石倉明、牛尾侑、豊田善治らに太田代志朗、古川修が京都・鴨川沿いの宿に集まり、「憂鬱なる党派」を巡る時代と背景について夜を徹した座談会を行った。

私はそのテープ越して纏めた原稿50枚を鎌倉の高橋和巳に送った。「見ておくよ」といった闘病中の高橋和巳はあへなく入退院を繰り返した。そして高橋和巳1971年5月逝去。座談原稿は「対話」8号・高橋和巳追悼号に載せるべく探索したが杳として分からずじまいだった。

その後、高橋和巳の蔵書関連の一部は坂本一亀の斡旋で近代日本文学館に収められた。高橋たか子著『この晩年という時』(講談社)によると、その他の蔵書関連はダンボール箱に詰められ高橋たか子、鈴木弁護士の事務所に引き取られた。ではその他の高橋和巳・関連資料はどこにいったのか……。

行方の分からぬ貴重な座談原稿は何者かにより故意に隠匿され消滅してしまったのか。無念極まりない。

そこには『憂鬱なる党派』に関する時代と思想、角逐する青春群像が明らかにされていたのである。

■多田富雄・新作能「花供養」。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2012年5月11日(金)10時52分44秒 返信・引用

世阿弥に魅かれ、詩的テキストとしての新作能に手を染めて何年たつのだらう。

浅学にしてその栄光なる舞台化の引き合いにまだ預かったことはないが、新作能の上演についてはやはり理解ある演出家が何といても必須条件だ。

多田富雄の新作能『花供養』は白洲正子没後十年目の命日に追悼公演として初演された。その多田富雄×笠井賢一による「作者と演出家の対話」(白洲正子・多田富雄著『花供養』藤原書店:2009年)は詞章、推敲、演出意図、配役、顔合せ、節付け、稽古と壮絶にして鬼気迫る一日一日の進行を明らかにしている。両者の創造のデーモンが沸々とする。

「演出家の意見を優先されよ」と能役者の勝手を許容しない慄然たるメールによる”往復書簡”に感動する。

「花の行方を尋ねん」と里椿の霊に向けた痛切な男舞だったのだらう。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■ひどい男なのか。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2012年4月5日(木)10時08分34秒 返信・引用

なるほどよくも言うてくれました。

粕谷一希『座談 書物への愛』(藤原書店)160~161ページ。

”高橋和巳というのは、ひどい男ですよ。ただ、彼が書いた本を読むと、彼自体が全共闘みたいなものだから、全共闘の精神はよく分かる。他は、ゲバ棒振り回すだけで何を考えているかすらわからないから。高橋和巳を読むと、「なるほどこういうことを考えているんだ」と理解できる。そういう役目をは果たしたが、やはりひどい男ですよ。……白川(白川静)さんに「高橋和巳はどういう人ですか」と聞くと、「そうだな、女々しい男や」、その一言で終わってしまった”。

ーアカデミズムとジャーナリズムを知悉する者の弁たるやも。

■葛藤と変節の辻井喬について考えへいる。て 投稿者:太田代志朗 投稿日:2012年1月30日(月)21時47分56秒 返信・引用

いまさらに小林秀雄の『故郷を失った文学』ではないが、確かに歴史はいつも伝統を壊すやうに働き、個人はつねに伝統のほんとうの発見に近づくといふことであらうか。

詩集『不確かな朝』(1955)を経て『異邦人』(1961)でデビュー。

70～80年代の高度消費社会を西武セゾングループ代表としてその戦略と野望のもと一族の血のゆらぎに父との確執や愛憎のなかで『彷徨の季節の中で』(1969)、『いつもと同じ春』(1983)を書き上げる。負のコンツェルンの宿業をかかへる内的な闘いだっただ。

1991年セゾングループの破綻整理に伴ひそれまでの異端ともいはれた経営代表を辞任。精力的な執筆活動とともに共同体の消滅した時代に向き合ふ。ここにおいて誰が思想的変節を笑おうや。

――私事において70～80年代の高度消費熱狂の時代から今日まで「堤清二＝辻井喬」はまた一つの戦後文学の思想を継承する境位としてゆるやかな時の流れの中で重たくある。戦後の断絶した伝統への志向や憲法9条の会など、性根すへていふのだが現下の情報氾濫の時代に辻井文学は実生活の実感を通じた論理的熱気として迫る。

そしていまなほつづくその「叙情と闘争」こそ鮮烈に彩られた悲壮的クロニクスであるいはねばならないのだらう。

■2010年――寒中の弁。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2012年 1月22日(日)14時19分32秒 返信・引用

2012年――新年があけ、すでに1月半ば寒中。  
風雅の土ここに存へる寒中の弁。

昨年の高橋和巳の生誕80年・没後40年に際しては高城修三、立石伯、後藤多聞、橋本安央、に声をかけ高橋和巳研究会への参加協力をおねがひした。いづれも快諾いただきありがたかった。

研究会といつてもまだささやかなネット配信で具体的なことはな何もやっていないのが現状であるけれども、ただ井波律子には私事あり今のところどこへも名を連ねたくないと丁重に断わられた。国際日本文化研究センター名誉教授なる中国文学研究の大家としてはさもありなんだろうが少し淋しかった。

井波律ちゃんはかつて拙歌集『清かなる夜叉』の葉に次のような文章を寄せてくれていた。

「あのころの高橋氏と彼らの関係性は、よくあるような、高名な作家と彼を身も世もあらずあがめる若者たちという、なにやらぞっとさせられる気色のわるい結び付きとは、決定的に異質な、もっと風通しのよい爽やかなものがあつたと思う。

――私は太田代志朗ら当時若かった『対話』同人が、高橋氏亡きいまなお抱き続ける感情のありかたを思う時、いつもなぜか“眷恋”という言葉を手かべてしまう。男同士の全面的な信頼関係とそこに賭けられた時を越える思いの深さには、まったく想像を絶するものがあり、羨望を感じずにはいられな

い。」

——ここに老い、世上乱逆耳に注せず寒中に滑稽なるまま存へているんだけどね。

■埴谷雄高さんを訪ねし夜のこと 投稿者：太田代志朗 投稿日：2011年12月9日(金)19時49分30秒 返信・引用  
木村俊介著『変人——埴谷雄高の肖像』(文春文庫)を読んでいるといろいろなことを思ひだした。

某編集者に連れられ吉祥寺の埴谷雄高邸を訊ねたのは1991年10月8日のことだった。  
戦後文学の伝説と饗宴の邸宅だった。

ご挨拶申し上げると「そうですか。あなたが”対話”の太田代志朗さんですか」と埴谷さんに真正面から鋭く見つめられた。『死霊』を書き継ぐ凛々しい目だった。

応接間には大きなボッシュの絵の複製がかけられてあった。ワインに寿司をご馳走になった。その時  
いったい何を当方は話したのだったか。高橋和巳のことに関してお互い何も話題にあげなかったのだが、埴谷さんは礼を以て接してくれたのにちがいがなかった。「こんなに初対面の人を歓待されることは滅多にないんですよ」と編集者に耳打ちされた。ありがたいことだった。

夕方の訪問は深更におよんだ。埴谷さんは最後に「じゃこれをさしあげます」と『戦後の先行者たち——同時代追悼文集』(影書房)にサインしてくださった。同書には原民喜、梅崎春生、三島由紀夫、椎名麟三、花田清輝、武田泰淳、竹内好、平野謙、荒正人、福永武彦とともに高橋和巳の追悼12編が載っている。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■遙かなる第一次「対話」連中よ——小松左京・傘壽のお祝いに 投稿者：太田代志朗 投稿日：2011年3月10日(木)20時26分26秒 返信・引用  
【日録】03月09日(水) 武州小庵、早春の日々。

ひと仕事終えぶらりと安寿を連れ昼下がりの元荒川縁を歩く。  
早春の青空に雲が流れてゆく。

畏友古川修よ。

昨日の読売夕刊に小松左京氏・傘壽の大阪におけるお祝いの記事、  
盛大な会で電子書籍出版事業にも取り組むといふ。

その SF 界大御所の写真の老いにびっくりしつつ茫々、  
完全にオレ達はその後の関連性において新たな覚悟をしたのだった。

「もう関係ないよ……」、  
そう、貴君がいったのは或る年の 5 月、  
朝の嵯峨野・二尊院を歩いていたときだったんだよね。

■同土、いかがお暮らし候や。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2011 年 3 月 5 日(土)20 時 45 分  
45 秒 返信・引用  
5 月京都に結集——高橋和巳没後 40 周年。

同土よ。いかがお暮らし候や。いかがお過ごし候や。  
「褐色の憤怒」もてゆけば弧城落日、無頼の手すさび筆ならし。  
解体の憂鬱なる党派なりて存へ 40 年——五月闇に邪宗の門が軋む。  
孤立の哀愁に涙が流れる。

春浅き日々、  
ラム酒をちびりちびり日なたぼっこしている老いぼれなりてよ。

■Re: 高橋和巳没後 40 周年について 投稿者:薄氷堂 投稿日:2011 年 2 月 25 日(金)18 時  
52 分 39 秒 返信・引用  
> No.43[元記事へ]

> 太田代志朗さん

こちらは春らしい春がないというか、いつ春なのかはっきりしないという悲しい土地  
ですが、今日は少し暖かかったです。当地には梅というものがなく、桜の開花も五月の  
中旬以降ですから、まるでお話になりません。

そんなわけで、ひたすら五月の輝きを待ちわびているのですが、まだまだ先ですね。

> さて、高橋和巳没後 40 周年です。

40 年……もうそんなになりますか。世の中一変して、あの頃を思えばまるで夢のよう  
です。かく申すべく自身、彼は昔の彼ならず、いまやただの酔っ払いというていたらく  
です。

> 昨年の三島由紀夫没後 40 周年の華々しい出版企画とちがい、これがいつわらざる現実なのでしょう。

高橋和巳は三島に一目も二目も置いていたようですね。

ぼくは最初に『潮騒』を読んだのがまずかったようです(笑)。たぶん体質的にこの手の物語は合わないのでしょう、おもしろくもなんともなかったもので、それ以来三島の作品とは縁がありません。別の作品を読んでいれば、またちがった印象を持っていたかもしれませんが……結局はぼくに見る目がなかったということなのでしょう。

■高橋和巳没後 40 周年について 投稿者:太田代志朗 投稿日:2011 年 2 月 24 日(木)16 時 19 分 8 秒 返信・引用  
薄氷堂さん、お元気ですか。

桃の節句・雛祭りも真近く当地では、日に日にあたたかく春のきざしでいっぱいです。昨年末以来の風邪がようやく治りました。本格始動しなければなりません、なかなか思うよう発進してくれません。

さて、高橋和巳没後 40 周年です。出版・編集関連各位に 2、3 当りましたが、高橋和巳特集なんて現今の厳しい出版状況もあり、まったく夢のまた夢であります。  
昨年の三島由紀夫没後 40 周年の華々しい出版企画とちがい、これがいつわらざる現実なのでしょう。

とまれ、それでも「褐色の憤怒」を以て歩むしかありませんね。

Re: バッハのチェロか、オルガンだったか。 投稿者:薄氷堂 投稿日:2010 年 12 月 15 日(水)19 時 51 分 49 秒 返信・引用  
> No.41[元記事へ]

> 太田代志朗さん

ほんとうに早くも歳末、時間は容赦なく過ぎ去るとというのが実感です。

> だが、陰々滅々高橋和巳にはオルガンよりもチェロの独奏でなければ似合わない、と。

オルガンかチェロか……ぼくなら迷わず人間の肉声に近いチェロを選びます。

そういえばバッハにはしばらくご無沙汰しておりますが、このところ毎日のようにブラームスのチェロ・ソナタを聴いております。どうもぼくにも陰々滅々たるところ

があるようでして。

音楽の話といえば、高橋和巳の作品中にクラシック音楽は登場しますでしょうか？  
ぼくはあまり読んでいないのですが、どうも記憶にはありません。クラシック音楽との関わり、興味がありますね。

さて褐色の砂塵ですが、少なくとも広小路からは煤けた校舎とともにすっかり始末されてしまったようです。まぶたを閉じればありありと見えますけれど……

■バッハのチェロか、オルガンだったか。 投稿者：太田代志朗 投稿日：2010年12月15日  
(水)11時30分23秒 返信・引用

薄氷堂さん、歳末、お元気ですか。

頃日、賀乙彦著『私の宝石』（集英社、19769）を読んでいましたら、青山斎場における高橋和巳の葬儀（1971年5月5日）にはバッハの無伴奏チェロ・ソナタが流れていたということでした。いや、バッハのオルン前奏曲かもしれない。だが、陰々滅々高橋和にはオルガンよりもチェロの独奏でなければ似合わない、と。

あの斎場に流れていたのは果たしてチェロだったのか。それともオルガンだったのか。  
いくら記憶を辿っても愚性にはわかりません。

そし来年は高橋和巳没後40周年。「褐色の憤怒」の意味を未だ問い続けています。  
薄氷堂さん、そしてあなたが指摘するように願わくは「褐色の砂塵」に埋もれ、痛み叫んでゆけばいい。  
そう思いながら、また一年がたってゆきます。

●無伴奏チェロ・ソナタ わが死せる朝の光の愛（かな）しくあれよ

■三島由紀夫没後40年——第40回憂国忌 投稿者：太田代志朗 投稿日：2010年11月23日  
(火)17時09分24秒 返信・引用

三島由紀夫没後40周年にていろいろな出版企画が目白押しだ。

高橋和巳も若く三島由紀夫には大きな関心を持っていた。その自死にあたっては鎌倉の家の病床でインタビューを受けた。

今年の第40回追悼会『憂国忌——三島由紀夫を通して日本を考えよう』は11月25日：九段会館大ホール。

私事ながら、思へば編集者上がりの姑息狭量な文藝評論のKが言ったことが今にして忘れられない。「お前さんが三島由紀夫に惹かれるのはともかくそれは危険なことだよ」。それは恫喝ではなかったか。私は一瞬たじろぎ俯いていたのだったがいったい何が「危険」だったのか。もっともその後の”お前さ

ん”とは縁なく会いたくもなく今にいたっているのですがね。

■Re: 杉本秀太郎氏のこと。 投稿者:薄氷堂 投稿日:2010年11月20日(土)23時36分15秒 返信・引用  
> No.38[元記事へ]

> 太田代志朗さん

ぼくは『憂鬱なる党派』の文体には抵抗を感じませんでした。もっとも読後ひどく気が滅入ったことをいまも忘れはしませんが。

彼の文章は非常に明晰で、ぼくがもっとも感心したのは『わが解体』です。日本語の散文としては最高水準のものではないかと思っています(などとえらそうなことをいう資格のないことは百も承知しておりますが……)。

文章を追うのは苦にならないけれど、彼の小説はどれも息苦しく、ひまつぶしとして気楽に読み流すようなものではないため、読む方にもそれなりの覚悟が必要ですから、本棚から取り出そうとしては手をひっこめる……その繰り返しで、まだ読んでいない作品がいくつもあり、ここではほとんど沈黙を守っている次第です。管理人の資格ゼロですね。

■杉本秀太郎氏のこと。 投稿者:太田代志朗 投稿日:2010年11月20日(土)17時51分39秒 返信・引用

2010年11月。今年の告知の紅葉は気候の寒暖はげしくいちだんと映えているようだ。そんな折しも、京町屋の杉本家住宅(京都市指定有形文化財)の奥座敷の庭を、名勝に文化審答申の報あり。もともと当家当主だった杉本秀太郎氏(1931～)はフランス文学者にて、かつて高橋和巳の長編『憂鬱なる党派』をして「こんな固い文体の小説なんか読めるか」と満座の中で酷評した。その日、私は誘われながらなぜか「VIKINNG」の読書会に出ていないのだが、仄間によると業を煮やした高橋和巳はその夜、ひとり深酒に酔いしれ「お前におれが分かってたまるか……」と荒れに荒れた。青山葬儀場で故高橋和巳の弔辞をよんだのがまた杉本秀太郎なのですがね。

■立松和平さんを偲ぶ会に 投稿者:太田代志朗 投稿日:2010年3月28日(日)21時52分54秒 返信・引用

2010年03月27日、立松和平さんを偲ぶ会(実行委員長・北方謙三)が東京・青山葬儀所でおこなわれる。

白百合や緑の木々に飾られた祭壇、友人有志による実行委員会主催。62歳で逝くにはあまりにもまだ若すぎる。和平さんのにこやかな肖像に思はず涙ぐむ。大導師・福島泰樹上人の法要読経に始ま

り弔辞に北方謙三、黒井千次、三田誠広、黒古一夫、高橋伴明、辻井喬氏ら。別れを惜しみ謹んで焼香。ファンなど一般参列 1000 人の長い列が続く。

四ツ谷・市ヶ谷のお塚端の 3 部咲きの花をタクシーから眺め人だかりの神楽坂。酒亭”も一吉”での献杯に間村俊一氏始め月光メンバーの竹下洋一、松岡達宜、渡辺浩史、中田實、織田百合子、高坂明良、それに元ボクサーで日本チャンピオンをノックアウトしたこともある元日本ランカーの本田宏一氏ら。いささか飲み立松和平論、大酩酊の帰路。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■高橋和巳の話題を！ 投稿者:太田代志朗 投稿日:2009 年 12 月 20 日(日)16 時 11 分 34 秒 返信・引用

『週刊金曜日』(2009 年 12 月 4 日号)が届けられた。

浅学にしてあまり読んでいない雑誌だが、ここには高橋和巳の写真が掲載されている。これは同誌における高橋和巳論展開につき、わがウェブサイト「花月流伝」の高橋和巳写真を見た編集者から写真掲載使用許可の問合せがあり、承諾したものだ。

私はこれまでもウェブサイト掲載の高橋和巳関連の写真使用については、すべて快諾してきている。写真一つでも掲げることにより、高橋和巳の話題に寄与するものであればいい。そう思っている。

高橋文学には、いまなおゆえしれぬ文壇的規制がかけられ冷笑・拒否・黙殺にあっている。ならば封殺された高橋文学を広く語り、研究し、大きく解き放さうと「高橋和巳研究会」を興し、BBS「高橋和巳を語る会」を開信したのだったのだから。

■Re: 兵頭正俊「全共闘記」U 大バリケード闘争 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2009 年 7 月 29 日(水)21 時 48 分 27 秒 返信・引用

> No.34[元記事へ]

> 太田代志朗さん

> だが兵頭正俊著『死山』『二十歳』『三月の乾き』など一連の作品は現実の R 大全共闘の運動と生活が描かれて興味深い。

ぼくは当時もつばら浮世離れた小説ばかり読んでいたものですから、兵頭正俊さんというお方は知りませんでした。

ネット検索したところ、兵頭さんはお元気で、現在ブログを運営しておられますので、ぼくもこれから拝見するつもりです。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■兵頭正俊「全共闘記」U 大バリケード闘争 投稿者:太田代志朗 投稿日:2009年7月25日(土)11時26分59秒 返信・引用

「安保世代」といふ十羽一括りにされる身には所謂「全共闘文学」について必ずしも理解のある立場ではない。

だが兵頭正俊著『死山』『二十歳』『三月の乾き』など一連の作品は現実のR 大全共闘の運動と生活が描かれて興味深い。

京都・広小路学舎や本部バリケード闘争を始め学園新聞社襲撃事件、また末川賞(選者:梅原猛・高橋和巳・真継伸彦)のことや日共スターリニズム支配体制学内権力、その荒廃からの教授陣の大量辞職などあからさまな現実に向ふ「全共闘記」が重くも鮮烈に迫る。

■幻の「遥かなる美の国」を思う 投稿者:太田代志朗 投稿日:2009年7月7日(火)16時32分41秒 返信・引用

柏原成光著『黒衣の面目――編集の現場から』(風涛社)の中にある“「人間として」(1970～1972)の時代”の項を読むと、改めて晩年の高橋和巳のことを考えさせられる。

①「人間として」同人の小田実、柴田翔、真継伸彦らと伊豆の合宿(民宿)の折、高橋和巳はいう。題は「遥かなる美の国」。女王の支配する国、その一世の興亡を書きたい。史記の列伝のような方法で。

②「人間として」は高橋和巳が積極的に提案したものだった。しかるに夫人によれば、それは高橋和巳の文学者としての本質部分でないということ。カソリック文学を志向する夫人に当の高橋和巳も共鳴していたというが、そうだったのか。

――そして新宿に「悲の器」という文壇バーが果たしてあったのかしら。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■Re: 爽やかなほほえみを 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2009年6月27日(土)22時56分40秒 返信・引用

> No.31[元記事へ]

> 一頃日、この『天理時報』編集部から、私のサイト「花月流伝」掲出の高橋和巳の写真の掲載許可のメールがあり熟慮、これも「供養」だと思い掲載許可に同意した次第です。写真は若き日、京都・円山公園――高橋和巳は爽やかにほほえんでいます。

太田さんが言及されている写真は、

花月流伝→高橋和巳序説→高橋和巳との日々(アルバムから)

とたどればごらんいただけます。

ワンクリックで写真を表示する URL が得られませんでしたので、念のためご案内いたします。

太田さんのおっしゃるとおり、たいへん爽やかな笑顔です。ぜひごらんください。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■爽やかなほほえみを 投稿者:太田代志朗 投稿日:2009年6月27日(土)16時03分53秒  
返信・引用

山崎国紀氏(花園大学名誉教授)が「母の“祈り”と父の“誇り”」(特別寄稿「近代文学に描かれた天理教」)を『天理時報』(2009年6月13日号)に載せています。

壮絶な闘病生活を送らねばならなかった高橋和巳に、天理教信者のご母堂が「どうぞ神様、お助けを」と必死に祈ります。「宗教は容認してもみずからは信じない」高橋和巳の深層を改めて考えさせられます。

――頃日、この『天理時報』編集部から、私のサイト「花月流伝」掲出の高橋和巳の写真の掲載許可願いのメールがあり熟慮、これも「供養」だと思い掲載許可に同意した次第です。写真は若き日、京都・円山公園――高橋和巳は爽やかにほほえんでいます。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■今、ふたたびの高橋和巳を 投稿者:太田代志朗 投稿日:2009年6月19日(金)20時54分50秒  
返信・引用

専門の研究論文を始め創作、エッセイなどで活躍の田中寛氏(大東文化大学教授)の「高橋和巳『墮落』にみる理想の悲劇性――文学における戦争責任と戦後認識」(「大東文化紀要」平成20年3月発行)は衝撃的な「墮落」論。その深い洞察と慧眼が新たな高橋和巳の世界を展開しています。

ところで私事ながら、目下、新文藝誌「月光」(勉誠出版発行)特集「全共闘と文学」で、「高橋和巳の解体」を執筆中です。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/>

■今なお 投稿者:堀田 一雄 投稿日:2009年1月30日(金)01時17分11秒  
返信・引用

そうか、高橋和巳が死んでから30数年の歳月が流れたのか・・・

「時間が経ってもなお 問いを發するお前たちは 解を内包する行動を取った者だ」

そう信じて 先頭を駆けたお前たちに 命の刻印として 榮譽を

堀田

■古井戸さんへ 投稿者:御影暢雄 投稿日:2009年 1月 12日(月)21時 41分 24秒 返信・引用

70年代のフォーク・グループで「古井戸」と言うグループがありました。近年の中国映画でも「古井戸」というのがありました。私と同じ、団塊の世代の方のようですね。私は、小林多喜二をこの数年、勉強しているのですが、高橋は多喜二について全く関心を抱いていなかったようですね。一方、多喜二は短編～中編小説しか残っていないのですが、実は長編小説を書こうとしていたそうです。高橋と多喜二の共通項はないように見えて、実はドストエフスキーを二人とも深く読んでいた・・・これが現時点での、私の「概観」です。

■Re: 高橋和巳の思い出 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2009年 1月 12日(月)13時 44分 17秒 返信・引用

> No.26[元記事へ]

> 古井戸さん

ご投稿ありがとうございます。

> 最近、鶴見俊輔『悼詞』に、高橋和巳追悼の一文が載っていたので懐かしかった。

> 記事に書いたのでよろしければご覧ください。

拝読いたしました。

狩野直喜先生のエピソードについては、立命中文のサイトに掲載されている白川静博士の『講演 京都の支那學と私』で知りましたが、時代背景を考えますと、たいへん立派なお話だと感心いたしました。

[http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/cg/lt/cl/shirakwa/kouen128\\_1.htm](http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/cg/lt/cl/shirakwa/kouen128_1.htm)

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■高橋和巳の思い出 投稿者:古井戸 投稿日:2009年1月12日(月)09時05分29秒

返信・引用

40年前新潮文庫、悲の器をよみました。高橋和巳をしたのは、その数年前、高校生の頃。朝日ジャーナルを購読していたので、邪宗門で。

最近、鶴見俊輔『悼詞』に、高橋和巳追悼の一文が載っていたので懐かしかった。

記事に書いたのでよろしければご覧ください。

<http://furuido.blog.so-net.ne.jp/2009-01-09-1>

<http://blog.so-net.ne.jp/furuido/>

■Re:「高橋和巳の青春とその時代」講想社 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2009年1月4日(日)21時17分4秒 返信・引用

> No.24[元記事へ]

> 御影暢雄さん

御影さん、2009年最初のご投稿ありがとうございます。

たいへんマイナーな掲示板ですけど、火を絶やしたくはありません。

せめて管理はしっかりつづけるつもりです。みなさまのご投稿がたよりですので、今年もどうかよろしくお願ひ申し上げます。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■「高橋和巳の青春とその時代」講想社 投稿者:御影暢雄 投稿日:2009年1月2日(金)21時44分48秒 返信・引用

「高橋和美とその時代」(講想社)の中で、三浦浩氏が「その若き日」と題する一文を寄せています。その中から、少し紹介します。

”・・・1949年の秋、僕は高橋と、京都の大学で会った。長身、白析の青年と言うより、多分に少年の面影を残した美しい青年だった。まだ松江の高等学校のボタンのついた制服を着て、小粋に幾分長い髪を、はらりと白い額に垂らしていた。・・・はじめて、高橋と長い会話を交わしたのは、大学の図書館の、二階の廊下のことである。高橋は、その頃からすでに、悩みを製造し、耽溺しているところがあったと思うが、シフレスの疑いがあるので、606を打ってもらったら熱が出た、これからの人生をどう生きるか、と、そんなことを、たいへん深刻に話したのを覚えている。彼は、その時、18才になったばかりだった。・・・”

若気の至りで、どこかでうつされた病気が、後々まで苦悩の原因になったことを三浦氏はほのめかしています。

こうした話を知ると、高橋の小説を違った角度から読みなおしてしまいます。「悲の器」の主人公の心の闇には、若い頃の、おぞましく苦い「キタ・セクスアリス」が潜んでいました。主人公は、自分(=高橋)とは全くタイプの違う人間としてではなく、実は彼は自分の分身として、描こうとしていたのではないか、と言う風にです

■Re: 悲の器 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2008年12月7日(日)22時31分20秒  
返信・引用 編集済

> No.22[元記事へ]

> cano さん

いらっしゃいませ。

> 私が席を立つ間際、「高橋和巳」という質問に「かなしみのうつわ」と答えていて、「それ違う！」と思いました。

大学生のカップルが文学史というよりも最近はやりの「雑学」の対象として高橋和巳をとらえているような印象を受けるエピソードですね。

おおかたの大学のキャンパスがこぎれいな平和の園と化し、フランスあたりなら大騒ぎになっているはずの劣悪な雇用情勢にもみなじと耐えているわが国の変わりようを見れば、音読みが訓読みになってしまうのもふしぎはないという感じがいたします。

> 亡くなった作家には新作が出ないという事実に気づき、ほとんどの小説を読んだ後は高橋和巳を封印していましたが、また読み始めようかなと思います。

私は封印こそしてはいないのですが、読もうとして手に取っては、気が重くなって本棚にもどすということを繰り返しています。

そんなとき茶の間のTVから芸のない芸人たちの発する甲高い関西弁が流れてくるのを聞くといっそうやりきれない気分になり、ついアルコールに頼ってしまう情けなさです。自分こそ「ひのうつわ」が「かなしみのうつわ」になってしまったのかもしれませんが。

最近勉強不足のダメな管理人でまことに申し訳ありませんが、どうかまたおいでください。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■悲の器 投稿者:cano 投稿日:2008年12月7日(日)21時39分43秒 返信・引用  
金曜日にイタリアン・カフェで休憩していると、大学生くらいのカップルが隣に座り文学史の勉強を始めました。作家と作品をマッチングさせる質問を交互に出し合っていました。

私が席を立つ間際、「高橋和巳」という質問に「かなしみのうつわ」と答えていて、「それ違う!」と思いました。しかし、長年間違えていたのは自分かもと知れないと少し怖くなり、ネットで確認していて、このサイトに辿り着きました。

亡くなった作家には新作が出ないという事実に気づき、ほとんどの小説を読んだ後は高橋和巳を封印していましたが、また読み始めようかなと思います。

■いいものを見つけました。 投稿者:gatayan 投稿日:2008年10月14日(火)14時25分6秒  
返信・引用

昨日、何気なしに書棚をいじってみたら、雑誌「文芸」の高橋和巳追悼号が出てきました。その、時代を感じさせる装幀、思わず手にとってしみじみ見入ってしまいました。時間を見つけて読み返そうかと思っています。

<http://blog.livedoor.jp/oomiwa393/>

■Re: (無題) 投稿者:薄氷堂(管理人) 投稿日:2008年9月28日(日)23時33分2秒  
返信・引用

> No.19[元記事へ]

> gatayan さん

ようこそおいでくださいました。

> これから、思うことがあれば 立ち寄らせて頂きたいと思います。

管理人は黒子に徹するべきだと考えているのが半分、最近高橋和巳どころか読書全般サボっているため、はずかしくて書き込みできないのが半分、掲示板の停滞ぶりには心を痛めつつも沈黙を守っております。

どうかこれからもときどきご投稿くださいますようお願いいたします。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■(無題) 投稿者:gatayan 投稿日:2008年9月28日(日)08時26分0秒 返信・引用

このようなサイトがあること今日初めて知りました。高橋和巳を読み始めてから、25年ほどになりますか。彼にとっては遅れてきた読者と言うことになろうかと思います。

これから、思うことがあれば 立ち寄らせて頂きたいと思います。

<http://blog.livedoor.jp/oomiwa393/>

■憂鬱なる党派＝苦悩教：教祖～高橋和巳 投稿者：御影暢雄 投稿日：2008年8月23日(土)19時48分1秒 返信・引用

以前にも書きましたが、昨年まで「憂鬱なる党派」＝憂鬱なる党派の存在・葛藤と信じ込んでいました。60年代の半ば過ぎ、はじめてこの本を手にした動機は、自分も含め多くの青年達が、空想的社会主義のヒューマニズムから出発して政治にコミットするようになったのに、”〇〇派だ！民青だ！”と違うセクトといがみ合うことを、どう理解すべきか悩んでいたからです。私は題名を、「憂鬱なる党派の存在」と理解していたのですが、間違った解釈でした。しかし、多くの青年学生を惹きつけるタイトルであったと思います。

■憂鬱なる党派との出会い 投稿者：春田 亮 投稿日：2008年8月12日(火)19時01分29秒 返信・引用

わたしが高校2年の図書館で出会ったのが最初である。40年以上まえのことで、はっきりとは記憶していないが、「罪と罰」同時期に読み、不思議と主人公の生き方が類似していたことを今でも鮮明に思い出します。

Re: 命日 投稿者：薄氷堂 投稿日：2008年5月3日(土)22時51分28秒 返信・引用  
> No.15[元記事へ]

> 野口邦夫さん

> 本日ですね。改めて....思い出したものですから。

1971年5月3日享年39歳でしたね。

野口さんの書き込みを拝見し、ひさしぶりに『わが解体』を手にとろうとして本棚を探したら、なぜかみつかりません。

十年前なら目をつぶっていても本のありかがわかったのに、最近こういうことが多く、ちょっとショックです。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■命日 投稿者:野口邦夫 投稿日:2008年5月3日(土)06時32分27秒 返信・引用  
本日ですね。改めて....思い出したものですから。

■(無題) 投稿者:御影暢雄 投稿日:2008年2月3日(日)21時42分3秒 返信・引用

高橋たか子著「高橋和巳の思い出」について、これから少しずつ紹介していきたいです。順不動で恐縮ですが、あとがきにこの本のエッセンスが書かれています。

「...これほどの苦勞をしてどうして別れもせずに17年間も一緒にいたのか、と訊ねる人がいるとすれば、その問いにははっきり答えがある。私は終始、主人の頭脳にこの上もない尊敬の気持を持っていたのであって、この尊敬は一切を覆って余りあるものであった。II(同著II章)におさめられている「かわいそうな人だいつも思ったこと」は、「群像」の高橋和巳追悼記念号に載った時、いや、その後いついつまでも長く、私が常識を蹴とばすようなことを書いたというので大変な話題を呼んでしまった。特に、狂人という言葉にひっかかった人が多いようであった。こと文学にたずさわっている人で、この程度のことに肩をひそめる人が多かったのは、まことに遺憾なことである。第一、狂人という言葉、私は讃辞として使ったのだ。作家芸術家で狂人でない人がいるとすれば、それは作家芸術家ではないだろう。また、ここに書いたことは、私が主人の在世中にこっそり観察していて、亡くなった途端に公表した、というふうに見た人も多かったようだが、そうではないのである。私は当の主人自身に自閉症の狂人云々の話をしている。主人は笑い、その通りだと言っていたのである。」

■埴谷雄高 投稿者:御影暢雄 投稿日:2008年1月12日(土)13時17分1秒 返信・引用

高橋和巳作品集NO6(河出書房新社)を手に入れました。「日本の悪霊」「暗殺の哲学」「散華」「散華の世代-往復書簡」「巻末論文-埴谷雄高」が収められています。

興味深いのは、往復書簡の中で埴谷・高橋がポーランド映画「灰とダイヤモンド」(アンジェイ・ワイダ監督)の一場面を、世代間の葛藤を象徴する映像と例えて引き合いに出して語っていることです。私も「灰とダイヤモンド」には強い思い入れがあるのですが、埴谷・高橋が世代論の材料として言及していたとは驚きました。主人公マチェックは孤独なテロリストで、敵対する党派のリーダーを暗殺します。書簡では、その場面が印象的な、象徴的なハイライトとして語られています。「灰とダイヤモンド」が公開された時、マチェックがサングラスをかけて無言で徘徊するシーンは多くの映画人・文化人・若者に強烈な印象を与えたそうですが、埴谷・高橋もそうであったと思われます。「心は孤独な哀しきテロリスト」=マチェックは高橋の小説の主人公と重なる影を背負っていたように思い出されます。

■Re:「高橋和巳の思い出」高橋たか子著 投稿者:管理人(薄氷堂) 投稿日:2008年1月3日(木)23時03分35秒 返信・引用

> No.11[元記事へ]

> 御影暢雄さん

新年のご投稿、まことにありがとうございます。本年もどうかよろしく願い申し上げます

ます。

こちらの掲示板では管理人は黒子に徹するつもり……というより、自分のサイトやブログで手一杯、とても余力がないものですから、さっぱり書き込みせず、申し訳なく思っております。

ここ数年ほとんど書物を打ち捨てて、読むヒトから見るヒトへ変身してしまった私ですが、ご推薦の『高橋和巳の思い出』を探して読んでみるつもりです。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■「高橋和巳の思い出」 高橋たか子著 投稿者:御影暢雄 投稿日:2008年 1月 3日(木)21時59分3秒 返信・引用

昨日、家内の実家で義父の残した蔵書から、「高橋和巳の思い出」(高橋和巳著)を見つけました。(1977年初版で、見つけたのは1979年20版の書)帯のコピーには、「高橋和巳文学は本質的に虚無僧の文学である」という同著の最高のエッセンスが紹介されています。11篇の「思い出」が収められていますが、あるものは高橋が亡くなった直後の文芸誌で読んだ記憶があります。今、読んでいる途中ですが、高橋文学と彼の精神構造を考えるうえで欠かせない、重要ないくつかの指摘がのべられていて、大変興味深いです。たか子氏は、「精神的には高橋が女で私が男だった。」と述べていますが、これは「捨子物語」を裏書するような証言といえます。初めて知ったことは、たか子氏が高橋の殆どの小説の「清書」を受け持っていたことです。たか子氏という献身的なサポーター無くして、高橋文学は世に出なかったと感じ入ります。高橋文学を研究される方には、必読の書といえるのではないのでしょうか。

■カラマーゾフの兄弟 投稿者:御影暢雄 投稿日:2007年 11月 7日(水)22時23分18秒 返信・引用

昨年来、亀山郁夫訳「カラマーゾフの兄弟」がベストセラーになっています。若い読者にもよく読まれていて、若者が文学から遠ざかったという神話を覆す現象が起きつつあります。亀山氏は最近のインタビューで「カラマ」の時代背景(農奴解放とそれ以後の社会の混乱)と今の日本に共通項があると推察されていました。ドストエフスキーをよく読んだ高橋和巳も、とりわけ「カラマ」には大きな影響を受けたのではないのでしょうか。埴谷雄高「死霊」と「カラマ」を比較する文学論が、これまで多々述べられてきたことは知られていますが、高橋が長編小説を志向するようになった原点の一つに「カラマ」は存在していたように私は推察します。「悲の器」の中の主人公の若き頃の「キタ・セクスアリス」のEPISODEは、ドストエフスキーの世界の再現のように私には思えます。「カラマ」の、高橋の文学への影響を分析すると面白そうです。

■魂懸(こん)よ反れー 10月19日・日録より 投稿者:太田代志朗 投稿日:2007年 10月19日(金)18時06分43秒 返信・引用

2007年10月19日(金)

晴。整体治療を受けて家に帰ると待っていた安寿が甘え纏いつく。夕方小雨。

「新しく家を建て、元気になったら魚釣りに行こ」と、東京女子医大の病室で死に喘ぐ高橋和巳(1936～1971)は最後の力を振り絞り不可能な夢を見続けた。

それは<幻想の家>における再生の祈りであり、大腸ガンで手術した腹部の傷跡こそ己の業(カルマ)であることを自認していたからだった。

この”無頼の点鬼簿”を脇目に存えて、また私はあえかな幻想の家を試みる。つまり書庫、書斎、リビングルーム、茶室、それに盆栽や陶芸のワーキングルームなどの設計プラン。

おお、魂(こん)よ反れ。「怒涛にゆらぎ義を立つるべき」(山中智恵子)とよ。

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta>

■小松左京「哲学者の小径」 投稿者:御影暢雄 投稿日:2007年9月24日(月)21時24分39秒 返信・引用

小松左京の昔のショートSFに「哲学者の小径」というのがあります。これは京都の有名なお寺の近くの散歩道を舞台にしたもので、中年3人組がタイムスリップしてきた学生の時の自分達3人組と遭遇するという内容です。主人公(小松)の友人の一人が高橋和巳がモデルであることは言うまでもありません。主人公達がその夜、昼間にあった学生と飲み屋で鉢合わせし、互いに絡んで喧嘩になります。主人公が酔いつぶれて帰宅し、ふと学生時代の日記を紐解くと、中年3人組と喧嘩をしたと記されていた……。この話には、小松らが体験した学生運動のトラウマが読み取れます。(「憂鬱なる党派」でも触れられている、昭和20年代中期の共産党の武装闘争時代。)短い小説で、SFという形を取っていますが、「青春とは何か」を考える永遠のテーマを語っていると思います。高橋のモデルが他の作家の小説に登場している、珍しい作品でもあります。

■浪速の臭いの希薄な高橋和巳の世界 投稿者:御影暢雄 投稿日:2007年9月18日(火)20時56分55秒 返信・引用

高橋和巳は生粋の浪速っ子ですが、彼の小説・随筆には何故か小松左京・開高健のような浪速の臭いが希薄です。「憂鬱なる党派」は大阪が主たる舞台ですが、「さすが大阪の人間が書いた」と思わせるようなくだけが見当たりません。彼が大阪の出身と聞いて、「あ、そうだったの?」と思う人も多いのではないのでしょうか。その理由は、これから皆さんとともにこの掲示板で深めていきたいのですが、私に思い当たることは、高橋が十代の後半に島根県松江市で2年間過ごしたことが大きく関与していると推察します。彼が文学全集を乱読し、小説の世界に浸るようになったのもこの頃だとされています。何故、そのような考えを抱くかという、私自身が大阪生まれ大阪育ちでありながら、大学生活は三重県で過ごしたからです。大阪を出る時は、大阪出身を誇りとしていました。しかし大学の4年の頃には、たまに帰る大阪に何となくゴミゴミした嫌悪感を抱くようになっていました。大阪から三重(津市)に

戻ると、ホッとするようになっていました。高橋は、松江での牧歌的な学生生活の中で、自然に恵まれた環境を堪能し、大阪と距離を置くような感性を抱くようになったのではないのでしょうか。高橋が鎌倉に移り住んだのは、京女の奥さんが京都を嫌ったからだと聞いています。自分の生まれ故郷に疎外感を抱く一、高橋の文学の底流にそうした感性が秘められているように私は分析します。

■Re: 高橋和巳を読む 投稿者:管理人(薄氷堂) 投稿日:2007年9月16日(日)21時34分11秒 返信・引用  
> No.5[元記事へ]

> ガーシュンさん

ご投稿ありがとうございます。

> 彼の作品だけは私が寝転がって読むことを拒否した。

そのお気持はよくわかります。

『憂鬱なる党派』の後遺症といったらいいのでしょうか、ぼくは次の長編を手にするのを長くためらっています。もちろんけっして忘れることはなく、胸の奥底に打たれた釘はなかなか抜けようとはしません。

ぜひまた文章をお寄せください。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>

■高橋和巳を読む 投稿者:ガーシュン 投稿日:2007年9月15日(土)16時26分42秒  
返信・引用

学生時代読書に三味の毎日、友人の書棚で見つけたのは憂鬱なる党派  
それから高橋和巳を読むことになるが、よく寝転がって本を読む自分であったが、  
彼の作品だけは私が寝転がって読むことを拒否した。

■「大本襲撃」(毎日新聞社刊) 投稿者:御影暢雄 投稿日:2007年8月12日(日)20時38分40秒 返信・引用

毎日新聞社から最近、「大本襲撃一出口すみとその時代」が出版されました。出口すみは、出口王仁三郎の妻であり、開祖出口なおの末っ子でした。昭和10年の第二次大本事件で王仁三郎らとともに逮捕され、6年半も投獄されました。言うまでも無く、高橋和巳の「邪宗門」は大本教をモデルとしており、「邪宗門」の時代背景と大本教への理解を深める上で、興味深い本が出版されたといえます。大本教を壊滅する前に、内務省・特高は共産党や左翼勢力に対する弾圧を徹底的に行っており、そ

のクライマックスが昭和8年の小林多喜二虐殺でした。昭和10年には共産党は、組織が壊滅したとされています。内務省・特高は、次の危険団体は大本教だと襲い掛かったように見えます。大本教は、私は断片的な知識しか持っていないので恐縮ですが、軍隊の高級将校クラスにも信者が少なからずいて、軍隊への影響を権力が危惧していたこと。出口王仁三郎は、「日本が戦争に負ける」という”予言”を明らかにしていたこと—が大本教が弾圧された理由だとされてきました。今回の「大本襲撃」にはそのあたりが、より詳しく記述されているのではと期待されます。

改憲論議がこの数年活発となり、現行憲法を守らんとされる方々が、戦前の特高の弾圧の歴史を強調されますが、弾圧は左翼も民間宗教も含めて、投網にかけられるように根こそぎに行われたことも注視しなければと私は思っています。大本教への弾圧も、多喜二の虐殺と同じく忘れてはいけない事件ではないでしょうか。もっと大本教の事件も、注目をされるべきではないかと思っています。

余談ですが、高橋の親友・小松左京は、朝日ジャーナルに「邪宗門」が連載されはじめた時、やっと高橋の才能が全面開花したと興奮を覚えたと言っています。同時に小松の小説「日本アパッチ族」にヒントを得ているなどピンと直感したと言います。後日、小松が高橋にそのことを、「邪宗門」をほめつつも指摘すると、「ぼれたか！」と苦笑いして認めました。二つの作品のコンセプトの相似性を探求すると面白そうです。

■掲示板再開、安堵！感謝！です。 投稿者：御影暢雄 投稿日：2007年 8月 5日(日)22時30分24秒 返信・引用

7月末で掲示板アクセスが不調となり、私のしつこい書き込みに家主さんが辟易したのかなとブルーな気持ちになっておりました。最近、掲示板への閲覧者が(コメントはされませんが)増えているようにみておりましたので、突然の休止には心の拠り所を失ったような気分さえしておりました。掲示板が再開され、また全国の高橋和巳愛読者に役立つコメントを書きたくて存じます。最近、昔読んだ本を再読する傾向にあります。十代後半—二十代前半が私の乱読時代でしたが、その頃読んだ本を今読み返すとつくづく、人生経験の不足から味読力が至らなかったと振り返ることが多々あります。以前にも書きましたが、「悲の器」の主人公の若き頃のキタ・セクスアリスのエピソード、20歳の頃の私は全く気にとめていなかったのです。この年になって、そのくだりが主人公の人間性を理解する大きなトラウマだとやっと合点した次第です。「憂鬱なる党派」もこれから、再読してみたい小説の一つです。この小説の中で、共産党のみすぼらしい専従が「同志諸君、同志諸君。」とうつろな目で、学生黨員に訴える場面。主人公が競艇でもうけてはしゃいでいる光景等が、私の印象に残っています。この本の初版本を持っていたのですが、親友に貸したところ、忘れた頃に手紙が来て、「この小説には私の分身のような登場人物が登場していて、この本に凄い愛着を抱いています。よければ、譲っていただきたいのですが・・・」とのお願い。結局、私の手元に帰ってこず、「憂鬱」はそれ以来、読めずじまいでした。彼が「似ている」とこだわった登場人物はだれだったのか、今も不明です。その謎も再読で、推理したいです。

■(管理人) > 私のしつこい書き込みに家主さんが辟易したのかなとブルーな気持ちになっておりました。

とんでもありません。せっかく書き込んでくださった記事が失われ、まことに申し訳ありませんでした。

> 最近、掲示板への閲覧者が(コメントはされませんが)増えているようにみておりましたので

誤解があってはいけませんので申し上げておきたいと思います。たくさん書き込みがあったにもかかわらず、管理人が取捨選択して、気に入らぬ投稿をバツサリ切り捨てていたわけではありません。

1日あたり数十件あった書き込みのほとんどすべてが、いわゆるスパム投稿、つまりらちもないイタズラだったのです。管理人の仕事は、毎日それを削除することなのです。

幸いこの掲示板は自動的に投稿されるスパムは受けつけないようです。

どうか今後とも当掲示板をご利用くださいますようお願いいたします。

■小田実氏を悼む 投稿者:太田代志朗 投稿日:2007年8月3日(金)15時38分26秒  
返信・引用 編集済

小田実氏が亡くなる。思えば鎌倉における高橋和巳の野辺の送りでは京都勢の参列が皆無の中で、小田さんはその巨体をかがめるようにして、「太田さん、高橋と雑誌をやっているんですね。何か手伝うことがあったら何でもいってよ」と気軽に声をかけてくださった。私は戸田円三郎氏(高橋さんの幼友達で当時北海道新聞社)と火葬場で向いあいその骨を拾って骨壺に収めたのだった。

その後小田さんとは、2、3度お目にかかったが(季刊『人間として』の「高橋和巳追悼号」ではその高橋論が印象的だった)、近年は阪神大震災の被災者支援を求める運動を始めとした活動についてブログなどで拝見するに過ぎなかった。ご冥福をお祈りいたします。(日録:7月31日)

先立って小中陽太郎氏から案内のあった映画&コンサート(会場:東京・内幸町ホール)は実のところ小田実激励の会だったのだろう。

小中さん、日本ペンクラブ京都講演の帰り以来、あなたからよく小田実論を聞かされました。一夕、ベトナム脱走兵やNHK制作・前衛劇(小田実原作・小中陽太郎演出)のフィルムも見せてもらいました。

そのたびにベ平連反戦活動の熱風が吹き上げたのですが、美的ラディカル派にしてエピキュリアンの憂士は一線を画しただけ微笑しているだけなのでしたね。(日録:8月1日)

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta>

■(管理人) 旧データの消失はショックでしたが、新掲示板にさっそくご投稿いただき、元気が湧いてまいりました。どうもありがとうございます。

さてこの掲示板には、投稿者がご自身の記事を編集・削除できる機能があります。

画面左下にパスワードをタイプする枠と「管理者メニュー」というボタンが並んでいます。パスワードをタイプせずに「管理者メニュー」のボタンをクリックすれば、投稿した記事のリストが表示されますので、記事を選んで編集または削除を行うシステムになっております。

どうかご活用ください。

■新掲示板設置にあたって 投稿者:管理人(薄氷堂) 投稿日:2007年8月2日(木)22時05分51秒 返信・引用 編集済

このたびはニフティの掲示板サービス停止(新掲示板に移行されたとのこと)の案内が、おそらくは別IDを利用して開設していたため、配信されていたはずのメールを読んでいなかった私には事前に伝わりませんでした。

そのためデータを保存する余裕のないまま閉鎖を余儀なくされ、利用者のみならずにはすっかりご迷惑をおかけいたしました。管理者としての不注意を心よりお詫び申し上げます。

太田代志朗さんにご相談したところ、たとえ過去のデータ復旧が無理でも、とにかく掲示板を再開しようではないか、ということになりました。

そこで今さらニフティとやりあうのも非生産的ですから、気を取りなおして、まずは再開しようと思い、個人的にも利用しているこの無料掲示板を選んだわけです。デザイン的にもう少し洗練されていれば……という印象は否定できませんが、使いやすかつ安定している点は評価していいと思ったからです。

当BBSの性格上、画像投稿の必要性はほとんどないと考えますが、相当大きいサイズの画像を投稿することもできます。そのへんの要領については、近いうちになんらかのかたちでご案内したいと思います。

これまで投稿された方には引きつづき記事をご提供くださるようお願い申し上げますとともに、これを機会に新たに投稿して下さる方が現れることを期待して

おります。

まことに簡単ですが、これをもって新掲示板出発のご挨拶とさせていただきたいと存じます。旧掲示板データの消失につきましては、重ねてお詫び申し上げます。

<http://homepage3.nifty.com/hakuhyodo/>